
3のジンクス

雪野 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3のジンクス

【Zコード】

Z5558C

【作者名】

雪野 空

【あらすじ】

主人公、森千香子もりちかこが18歳の誕生日に付き合い始めた、半澤心吾はんざわしんごとの恋の話。千香子は初めて本気で人を好きになるが、付き合つて3年目でフラれてしまう。どうにかして諦めようとしたが、なかなか気持ちに整理が着かなく3年の月日が流れる。千香子を想う山下大樹ただいきが、見るに見兼ねて告白するが…？！

第1話：願い

あれから3年が過ぎたね。
ねぇ、心ちゃん。あたしは今でも心ちゃんが好きだよ。

今日11月5日はあたしにとつて、凄く大切な記念日。きっとあたしの人生で、たつた1度キリの運命の恋が実った日だから。でも、今日はその恋に終止符を打つために、思い出の場所に来た。3年前隣にいてくれた心ちゃんは、今日をどんな気持ちで過ごしてるのかな…。あたしは、今すごく悲しい。でも、涙はもう流さないんだ。だって、あたしの涙を拭ってくれる心ちゃんの手がここにないから。心ちゃんと付き合って1年目の記念日にここに来て、あたしは初めて綺麗な夜景を見たんだ。別に19歳になるまで夜景を見たことがなかったわけじゃない。ただ、夜景を綺麗だと思ったのはその時が初めてだったの。大好きな人と一緒に見る景色は綺麗に見えるし、一緒にすることは楽しく感じる。そういうことだよね？

あたしは、心ちゃんが最初で最後の恋だと思ってた。

もちろん心ちゃんに出会つ前に、それなりに色々な人と付き合つてきた。

その時は本気で好きだと言つてたけど、心ちゃんに出会つてどれも本気じゃなかつたことに気付いたんだ。

心ちゃんと付き合つて、初めて氣付いた感情が沢山あつたから。だから、あたしには心ちゃんが最後だつたんだよ?『もしも別れたら…』なんて考えたことなかつたの。3年も一緒にいたし、離れることはないだろうって安心が心のどつかにあつた。でも、どんなに長く一緒にいたつて離れることはあるんだよね。

今でもまだ夢を見るよ。心ちゃんがまたあたしの傍にいてくれる夢。別れたあの日からずっと、同じことだけ願い続けてた。

でも、もう3年が経っちゃったね。やうやく潮時かなつて思つてる。
気が付くのが遅すぎるへりこだよね。
あと5分で今日が終わっちゃつ。いのまわしうまにしてしまえば
このこと。

第2話・嫌な予感

「心ちゃん、お風呂入つたら?」ソファーに寝そべっている心ちゃんの体を揺すつて、あたしは耳元でそう言つた。

「ん…」心ちゃんはゆっくりと起き上がり、近くにあつたタオルを持つて部屋を出る。あたしはその間に歯を磨くことにした。

心ちゃんと付き合つて3年。

あたしが高3の秋に付き合い初めて、2年目で同棲。あたしはもう心ちゃんと結婚するつもりでいる。

まあ、まだ21歳だし早いかもしないけど。

心ちゃんはあたしの4つ上だし、そろそろだねつて話してもして。正直に言つちゃえば、付き合い始めの頃の燃えるよつな感情はないかもしない。

でも、あたしはたぶん心ちゃんにかなり依存してゐる。心ちゃん無しでは生きてこけない体に、知らないうちになつていていたんだと思つ。

長く一緒にいると、空氣みたいな存在になるつてよく言つたけど、今あたしにはそれがよくわかるんだ。

無くなつたら死んでしまつから、絶対離れたくない。

あたしは心ちゃんに出会つて、本気の恋を知つたんだ。

別に心ちゃんがあたしの理想そのものじゃない。

むしろ、理想から離れてる部分のほうが多い氣もするし…。

だけど、やっぱり好きつて理屈じやないと思つ。

いくら考えたつて頭では理解できない。

でも、心ちゃんの指も髪も背中も全てが愛おしく思える。

それは今までのあたしにはなかつた感情。

まあ、心ちゃんに会うまでは学生なりの恋をしてたのかな?今考へるとちょっと軽かったかも…。あたしは熱しやすくて冷めやすいタイプだったから、いつも3ヶ月で別れてしまつてた。中には3日つ

て人もいたけど…。これが、あたしと友達の間でよく話していた『3のジンクス』。心ちゃんは初めて3ヶ月越えを達成できた相手なんだ。

今はまるで夫婦みたいだつて周りから言われる。なんだかくすぐつたい気もするけど、まだまだ夫婦つてよりはカッフルでいいな。なんかカッフルって言つた方がラブラブっぽいから。

第一、最近心ちゃん好きつて言ってくれないし…これつて熟年夫婦化してない?ただ慣れちゃつて言葉が必要なくなつてきただけだよね…。少し不安だな。でも、いつも心ちゃんは『ありえねえ。』つてあたしを馬鹿にするの。だから、信じてるよ。

あたしはソファーの上の心ちゃんの携帯をちらりと見る。まだシャワーの音が聞こえるから、心ちゃんは上がつてこないだろ?。あたしはゆっくりと携帯に手を伸ばした。

「ちこー。シャンプー詰め換えんの忘れてたー。」突然心ちゃんが風呂場から叫んだので、思わず体がびくつとなる。

「今持つてくー。」あたしは何だか携帯に氣を取られつつも、心ちゃんの元へシャンプーを届けに行つた。絶妙のタイミングで心ちゃんから声をかけられたので、神様が見るなつて言つてゐるよつに思えてやめた。

なんだか嫌な予感がした。

第3話・戦えない

あたしは今日久しぶりに心ちゃんの仕事場に遊びに来ていた。元々、ここでバイトしていたので、仕事場のみんなとは親しくしてる。心ちゃんとの出会いもここ。

「すず。久しぶりい。」

「あつ、ちかたん。久しぶりですー。」

すずは嬉しそうに笑つてあたしに抱き着いた。この男だらけの仕事場で、唯一女の子のバイトがすず。すずはあたしの3つ下で、凄くあたしになついてくれてる。ちょっとボケてるけど、明るくて素直な子だ。あたしはすずが大好き。心ちゃんに会うためでもあるけど、ここに来るときは必ずすずに会いたくなつた時。

「ん、髪切つた？」

「そうなんですよー。」

「可愛くなつたね。彼氏喜んだじやない？」

あたしのそんな問い合わせに、すずはなんだか悲しそうな顔をした。
「実は結構前にフられたんです。」

「えつ？！」

あたしは大声を出して驚いた。リアルにびっくりしたから。だつて、あんなにラブラブだつたのに、めちゃくちゃ自慢してたのに…。

「大丈夫？なんですが相談してくれなかつたのー？」あたしはすずの頭を撫でながら、そう言つた。すずのことだから、相当泣いたに違いない。

「もう、大丈夫ですよ。」すずは笑顔を見させてくれたけど、まだ少し悲しそうだつた。次に付き合う人は、すずを大事にしてくれる人だといいなあ。

ふとあたしは壁に張られたメモ用紙を見つけた。
バイトの子の名前と携帯番号が書かれた紙。

そういうえば最近バイトが増えた、連絡先がよくわからないうて心ち

やん言つてたなあ。

名前を読んでいくと、下から2番目はすずの名前が書いていた。

でも、すずだけは特別。

名前の前にアホって書いてある。これって心ちゃんの字だよね……？
その時あたしにはわかつたんだ。心ちゃんが、すずのことを特別扱
いしてるので。ハートを語尾に付けるより、そりやつて馬鹿にする
方がずっとわかりやすい愛情表現なの。だってあたしがバイトだつ
たときも、心ちゃんはそつやつて馬鹿にしてたから。

やだよ、心ちゃん。お願ひだから、すずだけはやめて……。すずとは
戦えない。

第4話・奪わないで

予感がだんだん確信に変わつてくると、人間つてのは逃げたくなるもので…あたしは毎日自分の考えを否定していた。心ちゃんの携帯も怖くて触れなかつた。あれから3ヶ月近く仕事場に行つてない。何より怖かったのが、すずからのメールがまったくと言つていよいよ来なくなつたこと。すずがあたしに後ろめたいことがあるから、メール出来ないんだとしか思えなかつた。何でよりによつてすずなんだろう…。心ちゃんの気持ちがあたしから離れてることはわかつてゐる。でも、それを言葉にしてしまつたら、きっと心ちゃんはあたしから離れる道を選ぶ。だからあたしは知らないふりをする。それが悲しいことだつてちゃんとわかつてゐる。でも、心ちゃんと離れるよりはマシなの。例えそこに愛がなくて…。

「お帰りー。」あたしはいつも通り玄関まで来て心ちゃんに抱き着いた。同棲し始めた頃、心ちゃんの帰りが待ち遠しくて…帰つて来たときはこいつやつて愛情表現した。あれからずつとあたしの気持ちは変わってないつて、毎日心ちゃんにアピールしてるんだよ?

「今日も疲れたー。早くちこのご飯食いてえ。」心ちゃんはあたしの頭を撫でて、部屋に行つた。抱き着いていたあたしの腕がほどける。

『心ちゃん、約束忘れたの?』あたしは心中でそう言つた。同棲を始める時、あたし達は決まり事を作つた。おはよう、おやすみ、いつてきます、ただいまのときは必ずキスするつて。喧嘩してたとしても、絶対するつて…。だから、あたし達はすぐに仲直りしたんだ。このキスには大きな力があるんだよ?

「今日は麻婆春雨ー。」

だけど、あたしはあえて何も言わずに、笑顔で言つた。

「おつ、いいねえ。」

心ちゃんもいつも通りに笑う。

これでいい。今はこれ以上望まないから。だから…だから、心ひやんをあたしから奪わないで…。

「…ねえ、心ちゃん。好きだよ。」

第5話・決断のとき

「最近、心ちゃんの帰りが遅くなつた。1時間とか2時間じゃなくて、ほんの10分程度。だからあたしは何も聞けない。ちょっと仕事が忙しかつたのかな、とか自分に言い聞かせるしかないんだ。でも、きっとそろそろ『まかしがきかなくなる頃』だつて、あんまりキスしてくれなくなつたもん。多分それはあたしに対する愛情がなくなつたからじゃない。後ろめたいと思う気持ちが愛情に勝つちやつたから。きっと愛情は0%になつたわけじやなくて、ただあたしに対する愛情より、すずにに対する愛情の方が上になつたんだろう。心ちゃんから別れを告げられたら、あたしはどうするかな。きっとその時にならないとわからない。今は考えただけで息苦しくなるけど、心ちゃんの口から別れの言葉を聞いたら頭が真つ白になると思ふから。

あたしは今までに撮つたプリクラを眺めた。馬鹿みたいにふざける2人がそこにいる。今はこんな風に笑えないね。お互い心に迷いがあるから。

涙は自然と出た。プリクラ一枚一枚にちゃんと想い出があつて……3年前のプリクラだって見るだけで会話が思い出せちゃう。記念日は必ず休みを取つて出かけたね。その日は毎回夜景を見に行つた。来年も再来年もずっとずっと一緒に過ごすはずだつたのに……。心ちゃんの嘘つき……。

はつと気付いて時計に目をやると、もう夜の11時を回つていた。今日はいつもより30分も遅い。覚悟を決めろつてこと?今日言つつもりでいるの?やだよ、あたしまだ心の準備が出来てない。きっとそんなのいつになつても出来ないだろ?けど……。ガチャ、ドアの開く音が聞こえた。

決断のときが来たんだ。

第6話・星一つない空

「おかえり。」あたしは玄関まで出迎えに行かなかつた。テレビの液晶をただぼんやりと眺めたまま。心ちゃんが荷物を置いた音がした。

「ただいま。」そう言つてあたしの横に座る。

「遅くなつて」「めんな。腹減つたべ?」優しく、まるで小さい子に話しかけてるみたいな心ちゃんの声。少しづつ最後の時を静かに迎えるんだ…。

「話しあるんじゃないの?」焦られれば焦られるほど辛かつた。今は早く心ちゃんの気持ちを聞きたい。

「…」「めん。ちこのこと嫌いになつたわけじゃないんだけど…。」そんなのわかつて。心ちゃんはあたしを嫌いにならない。今まで過ごして来た時間でわかるもん。

「ちこも気付いてると思うけど、すずのこと気になつて…」あたしはずつと黙つていた。頭がぼーっとして何も考えられなかつたから。「あいつ彼氏にフリされてから、いつもが見てんの辛くなる感じで…最初は相談にのつてただけだつたんだけど、段々ほつとけなくなつて…もう、ちこのことだけ考えてやれないんだ…。」心ちゃんは苦笑しそうに、辛そうにあたしに言つた。でも、あたしにはその声がうつとうしかつた。あたしの大好きな心ちゃんの声でそんなこと言わないで。あたしの目の前にいる人は誰?

「底うみたいで変だけど、すずはずつとちこのこと気にしてた。悪いのは俺だから。」当たり前じやん。裏切つたのはすずじやなくて、心ちゃん。そんなのわかつて。でもね、あんなに好きだつたすずでさえ、今は好きだと思えない。すずが現れなかつたら…なんて考えてる。人間つて醜い。

「ちこ、本当にごめん。」心ちゃんの瞳にうつすりと涙が浮かんだ。あたしも泣いた。

「…嘘つせ。」

「じめん。」

「じめんじやないよ！結婚するって言つたじゃん！あたしは…心ちゃんとの未来しか考えてなかつた…いなくなつたら、何もなじやん…！」思いつきり心ちゃんの胸に頭をぶつけ、あたしはそのまま大声で泣いた。心ちゃんが頭を撫でてくれないから、涙は全然止まらなくて…。

「殴つてもいいよ。何してもいい。ちいの望むとおりにするから。」何それ。殴つたつて何も変わんない。望むとおりにしてくれるなら、あたしの傍を離れないでよ…。

「すずと付き合つの…？」

「そういう話はしてない。ただ、けこと付き合つてゐるの…すずのことばつかりつてなるのは駄目だと思つて…」

「あたしとは別れるんだ…？」

あたしの問いに心ちゃんはじくじく首を動かした。別れるんだ…別れる？別れられる？無理だよ…心ちゃんがいない人生なんて何の意味もない。

「どうしてあたしじや駄目なの…？」

「ちこが駄目なわけじやない。俺が…」心ちゃんはあたしから目を反らし俯いた。その瞬間涙が一粒落ちたのが見えた。

泣かないでよ、心ちゃん。それはずるいよ。

「…無理だよ…」あたしはそう叫んで家を出た。当然、心ちゃんは追つてこない。

あたしは物分かりのいい女じやないから、そんなにあつれつ別れを認められない。でも、心ちゃんを本当に好きなら、心ちゃんの気持ちをもつと考へてあげるべきだ。

あたしはふりふらとあてもなく歩き、ふと田に入つた公園のブランコに座つた。さすがにこの時間は誰もいない。あたしはゆっくりとブランコをこぎ始めて、空を見上げた。星は一つもない。

「そつか…今日曇りだつたから…」

いつもは綺麗だと思った夜空は、今日は一際真っ暗で、小さなあなたに襲い掛かって来た。
助けて…心ちゃん。

第7話・帰れり

朝日が昇つて來た。一体、何時間ここに居たんだろう。新聞配達のバイクの音が、遠くから聞こえてくる。

意外と冷静になれるもんだな、とつづづく感じた。あんなに取り乱して泣いて、叫んで、家を出たのに、ただぼーっと座つてゐるだけで落ち着いてくる。

どんなに時間が過ぎても、心ちゃんと別れるという現実は変わらない。あたしがそれを認めようが認めまいが、心ちゃんの気持ちはもう決まってるんだ。あたしが無理に心ちゃんの傍にいることを望んでも、もう2度と幸せだと思える日は来ないだらう。心ちゃんの気持ちがあたしにないのだから…。

わかつてるんだ、ちゃんと。ただ少しだけ困らせてみたかっただけ。あたしを裏切る心ちゃんを、困らせたかっただけだよ。

心ちゃんが辛いのはあたしが一番わかってる。だってあたしが心ちゃんの1番近くにいたから。心ちゃんを愛してるから。心ちゃんが見せた涙も嘘じやない。全部わかつてるよ。

早く帰つてあげなきや。きっと心配してゐる。心ちゃんは寝ないであたしの帰りを待つてゐる。あたしと同じように苦しみながら。帰つたら、わかつたよつて優しく言つてあげよう。笑つて心ちゃんを見つめよう。最後が涙なんてやつぱり悲しすぎるもんね。

心ちゃんのいい人生なんてつまらないから、少しだけ思い出と一緒に過ぎ去つうかな。そうすれば、悲しくないと思うんだ。少しだけだけどね。きっと心ちゃんはあたしの最後のわがままを受け入れてくれる。それくらいいいよね? 罷当ならないでしょ? ねえ…神様。あたしはブランコから降つて、お尻に着いた汚れを払つた。気付いてみてみれば、髪の毛はぼさぼさだし、すっぴんのジャージ姿。自分の情けない姿に思わず少し笑つてしまつた。

大丈夫。笑える。あたしは強くないけど、弱くもない。しばらくク

ヨクヨしたつて、何年かすればいい思い出になるよね。今はただそう信じて、心ちゃんのもとに帰るとするよ。今はまだ大好きな心ちゃんのもとに…。

第8話・おやすみ

「…ただいま。」慌てて玄関まで走って来た心ちゃんに、あたしは笑つてそう言つた。

「お、おかえり。」心ちゃんは拳動不審になりながら、言葉を返した。

…やつぱり寝てなかつたんだね。

「心ちゃん、仕事でしょ？少し寝たら？」

「いや…大丈夫。」

「そう？じゃあ、朝！」はん作るね。」あまりにもいつも通りなあたしの態度に、心ちゃんは困惑氣味だ。何度も口を開きかけて、また閉じる。それの繰り返し。もうあたしを悲しませたくないんだよね？だから怖くて何も言えない。それは十分あたしへの思いやりだつて思うよ。だから、許してあげる。

「…条件が、ある。」

心ちゃんがキョトンとした顔であたしを見る。

「ここの物を実家に持つて帰るんでしょう？2人で買ったものも半分しなくちゃいけないし。今日でさよならつてわけにはいかないじゃん？だつたら…だつたら、あと何日かの間今まで通りに過ごそ？心ちゃん、あたしのこと嫌いになつたわけじゃないんでしょ？最後は笑つてバイバイしたいから：だから最後は今までの2人で過ごして。それが、別れる条件。」あたしは真っすぐに心ちゃんを見た。心ちゃんは最初驚いていたみたいだけど、少し考えるように俯いた。

「反論は無しだよ。…いいでしょ？」これが、あたしの精一杯だよつ

…」そう言つてあたしは泣き崩れた。もう泣かないつもりでいたのにな。もう平氣だと思つたのにな。やつぱりまだ苦しこよ。悲しいよ、心ちゃん。

「わかった。」心ちゃんはあたしと同じよつこしゃがんで、あたしの涙を拭つた。その指が、瞳が『こめんな』って言つてる。別れる

つて、そう決めたつて…こんなにも心ちゃんの全てが愛おしこよ。
「さあ、して…」あたしがそう言ひつと、心ちゃんは力強くあたしを抱きしめた。あたしも心ちゃんの背中に腕を伸ばし、しがみつくようにして泣いた。

心ちゃんの匂い落ち着くな。

あたしの髪を優しく撫でるその手も。

心ちゃんはわかつてるもんね。あたしが泣いたときはいつもすればすぐ泣き止むんだつて。喧嘩したつていつも心ちゃんは相手にしてくれなかつたよね。あたしが馬鹿みたいに泣いて怒つて…心ちゃんはその度にこうやつて慰めるの。それであたしは眠つちやうんだ。まるで幼い子供が泣き付かれて眠るみたいに。

おやすみ、心ちゃん。あたしは深い眠りについた。

第9話・麻婆春雨

心ちゃんは、本当に今まで通りに接してくれた。あたしを馬鹿にして、甘やかして、キスをして…。あたしも泣いたりしなかった。だつて幸せだったから。でも、とうとう今日が最後の夜になってしまった…。

毎日少しづつ家の物がなくなり、それが同時に思い出も消えていくように感じて悲しかった。

2人で買ったものは全てあたしが貰うことになった。

よく考えれば当たり前だよね。

新しい恋に進もうとしてる人間が、過去の思い出を持つていくわけがない。…馬鹿だな。だつてそれが少し悲しいんだもん。このソファーを見たとき、レンジを見たとき…あたしを思い出してほしかった。心ちゃんにあたしという彼女がいたことを、あたしという人間を愛したことの一生涯忘れてほしくない。これはわがままなんだろうか…。

アパートを出ていくのはあたしが後なので、手続きはやつておくと心ちゃんに伝えた。

でも、あたしはしばらいくじでよつと思つ。

荷物だつて沢山あるし、実家に帰るのは少し情けない気がしたから。…なんて、本当の理由ではないけど。きっとあたしは友達に、家族に見栄を張つてそういう言つだらう。でも、本当は…心ちゃんがいつでも帰つて来れるように、ここで待つていていいから。こんな女うざいんだろううね。わかつてゐるから、口に出して言つたりしない。最後の悪あがきかもしれないね。往生際が悪い女。

さて、今日のご飯は何にしようかな。最後だから贅沢に?…うつぶ。いつも通りの2人で迎えたいから、大好きな麻婆春雨にしよう。心ちゃんの大好きな、麻婆春雨に。

第10話・最後の夜

「…今日ね、新しい化粧品買つたんだ。」

「ふーん。」

「ついでにお菓子も買つてきた。全部食つちゃつたけどね。」

「うわ、最低。」

あたしは心ちゃんの腕にしがみつき、クスクスと笑つた。
布団に入つてくだらない話を始めてから、もう1時間近く経つかな
…。じゅうやつて話をするのは久しぶり。でも、そろそろ寝なくち
や。心ちゃんきっと眠いはずだよね。だけど、これが2人で過ごす
最後の夜だから、あたしが泣き出さないよう話をしてくれてる。
…大丈夫なのになあ。だつて、もう心ちゃんの前では泣かないって
決めたもん。

「…エッチしよ?」

ふつと口から零れたあたしの気持ちだった。これが最後の夜なら、
心ちゃんに愛されていたことを身体に刻み付けなきや…そう思つた
から。でも、心ちゃんは何にも言わない。ただ石みみたいに固まつて
る。

「駄目だよー。心ちゃんなら喜んで飛び付いてこなくちや。」あた
しはわざと冗談っぽく言うつた。今日は今までのとは違う。そ
れを心ちゃんは感じてると思う。でも、そんな風に重たく捉えてほ
しくなかつた。ただ今までみたいにあたしを愛してほしかつた…そ
れだけなの。

心ちゃんはあたしに優しくキスをした。泣きそうに震える唇に。涙
が溢れそうな瞳に。何回も小さくキスをした。それが『ごめんな
ゴメンな。』つて何回も言つてゐるように思えて、凄く切なかつた。
あたしは心ちゃんの首に腕を回し、ぎゅっとしがみついた。泣かな
いように、悲しくならないように、ただ心ちゃんに愛されてること
だけを感じた。ただ心ちゃんの温もりだけを感じた。

心ちゃん。心ちゃん…。あたしの中はこんなにも心ちゃんでいっぱいよ。あたしを愛してくれてありがとう。いつも傍にいてくれてありがとう。叱ってくれてありがとう。あたしはそんな想いを込めながら心ちゃんの身体にキスをした。首筋に愛し合った跡を残したかつたけど、さすがにそんなこと出来なかつた。そのかわり心ちゃんの背中に、小さな傷を付けた。小指で少しだけ引っかけて…。最後の嫌がらせ。こんなものなんどでも言い訳が出来るでしょ？でも、心ちゃんにはわかってるの。あたしと最後に愛し合つたときの傷痕だつて。…だからせめて、この傷痕が消えるまで心ちゃんの中に、あたしという存在があるといいな。いつそのこともっと深い傷を付ければよかつたかな。…なんてくだらない女。あたしつてこういう人間なんだ。

寂しくて寝付けないと思つたあたしは、心ちゃんと手を繋いで眠つた。やつぱり心ちゃんの手は、あたしを安らかな気持ちにしてくれる。最後の心ちゃんの寝顔をしばらく見つめてから、あたしは目を閉じた。

涙は一筋だけ流れた。

第1-1話・サヨナラの代わり

青いカーテンが塞ぎ切れなかつた朝日が眩しくて、あたしは目を覚ました。目覚ましのなる10分前。今日はこのまま起きてしまおう。悲しくて眠れないと思つてたのに、あたしは深い深い眠りの中にいたと思う。

夢を見ない日は久しぶりだつた。…心ちゃんの左手のおかげだね。もう、この手はほどけてしまつたけど…。心ちゃんはあたしに背を向けて眠つていた。左を向いて眠るのが心ちゃんの癖だつたから、こんなのなんでもないんだけど…目覚めたときに背を向けられているのは、やっぱり少し悲しい。遠く感じぢやうよ。

あたしは心ちゃんを起さないよと、そつと布団を出た。もしかしたら、心ちゃんも起きていたかもしれないけど。

あたしは変なことを考えないように、心ちゃんの寝顔を見ないまま風呂場に向かつた。まだ少し眠つている身体をシャワーで洗い流すように、気持ちもすつきり洗せたらいいのにな。

でも、何でだらう？ 最後が近付けば近付く程、悲しさが減つていく気がする。

…この場になつてもまだ信じ切れてないのかな。心ちゃんはもうあたしの傍から離れていくのに…。都合のいいときに現実逃避。でも、その方がいいかも。心ちゃんのことばっかり考えてたら、泣いてばかりで仕事にならないだらうじ。せめて今日は…全てを受け止めなくとも許してもういえるんじやないかな。

ね、神様？

いつも通りに支度を済ませ、いつも通りの時間に玄関に立つた。どうせ今から10時間後には、また同じ場所に帰つて来るんだ。悲しくなんかない。

靴を履きながら、あたしは何度も寝室に目をやつた。ドアは閉まつたままで、心ちゃんは出てこない。

いびきをかいていないから、きっと狸寝入りなんだろうな。

…やっぱり最後に心ちゃんの顔を見ておこうかな。いろんなことを考えて、一度履いた靴を脱ぎかけたときだった。寝癖のついた頭を搔きながら、心ちゃんが寝室からゆっくりと出て来た。何て言えばいいかわからなくて、あたしはただ玄関に突っ立っていた。心ちゃんはあたしの傍まで来ると、寝起きの掠れた声で

「…いつてらっしゃい。」と言った。その言葉に『サヨナラ』の意味も込められていること、ちゃんとわかつていた。だからあたしもちやんと言ったの。

「…いつてきます。」って。

…ちゃんと笑えたよね？大丈夫だよね？心配しないでね。幸せになつてね…。

ドアは静かに閉まった。

第1-2話・遠いどつか

休日だつたせいか、職場が忙しかつたのは好都合だつた。何も考えずに働くのが、たぶん今は1番楽。それが逃げることだとわかつてゐし、現実を見なきやとも思つ。もつ少し学生の頃にも失恋しておくべきだつたかな。そつすればこうこうときどくすればいいのか、わかつたのかもしれない。とつあえず明日は仕事が休みだし、ゆつくり眠る。づ。

鞄から鍵を取り出し、穴に差し込んだ。

ガチャ、という音がいつもより大袈裟に聞こえた。自然と深呼吸している自分がいる。…だつて開けたらもうそこには心ちゃんはないんだもんね。ゴクリと一つ唾を飲んで、ドアを開けた。ぱつと見るだけでは何も変わらない、いつもの家。だけど、あたしにはわかる。沢山の2人の思い出が無くなつてること。

ああ、本当にもう心ちゃんはないんだ…。帰つて来たら心ちゃんが出迎えてくれるかも…とか馬鹿みたいに考えてた自分が情けない。やつぱりちこが好きだ!とかつて。言つてくれる訳無いか。超妄想癖。笑える。

「…ただいま。」呟いただけなのに、あたしの声はよく響いた。誰も返事してくれないんだね。わかつてゐるんだけどね。

「…ただいま!」ねえ、心ちゃん帰つて來たよ?お帰りつて出迎えに來てよ。そしてキスしてよ。だつてそれが2人で決めた約束じやん。

「…ただいま…」

お帰りつて言つてよ!心ちゃん…。あたしは力無くその場に座り込んだ。心ちゃんがいてくれないと、あたしの存在する意味がないんだよ。あたしの手は心ちゃんにしがみつくためにあつたし、瞳は心ちゃんの笑顔や寝顔を見るためになつた。あたしは心ちゃんがいなきや生きていけないんだよ…。

泣いても泣いても涙は止まらないくて…玄関が湖になつてしまつてはいかと思うくらい泣いた。こんなに泣いてばっかりいたら、千からびて死んじゃうかもね。

心ちゃん。本当にもう会えないの？気が変わつたつて戻つて来てくれるの？勝手だつて怒ると思ひけど、許してあげるよ？だつてあたしで駄目な理由なんてないじゃん。お互いB型同士で、わがまま好き勝手やるくせに、こんなにお互い好きでいれるのは凄いって言つてたじゃん。あたしだつてそう思うよ。心ちゃんの嫌なところいつぱいあつたし、何回も怒つた。でも、それよりも好きだつて思う気持ちが大きかつたの。それは心ちゃんも同じだったはずだよ。きつとうまいくのなんて最初だけ。後から嫌などこが見えて来て、別れちゃうのがオチなんだから。あたしたちの過ごした3年は長いんだよ？濃いんだよ？他の誰にも負ける訳無い。

だから失敗して戻つてくれればいい。どんな言い訳だつて認めてあげるから、あたしのとこに戻つてくれればいい。

すずが心ちゃんの全部を理解しなければいいのに。…あたしつて最低な女。どうして愛してる人の幸せを壊そうとするんだらう。性格歪んでるのかな。実はめっちゃ腹黒い奴だつたの？

でも、やっぱりあたじじゃなきや駄目だよ。心ちゃんを幸せにするのは、あたしだけでいいもん。他の誰もいらなこよ。もうみんななくなればいい。心ちゃんとあたしだけの世界なら、心ちゃんはあたしを愛してくれるでしょ？

…なんだかこんなことばっかり考えて、あたしの『愛』つて全然綺麗じやないね。だから心ちゃんは離れていったのかな…。

遠い遠いどこかに。

第13話・煙草

玄関でぐずぐず泣いていたはずのあたしは、しつかりと布団に移動して寝ていた。気がつけばもう脛近くだ。

布団を残してもらつたのはすゞくありがたかつた。心ちゃんの匂いがするから、まるで心ちゃんに抱かれているような気がしてよく眠れる。匂いなんて何日かすれば消えてしまうんだろうけど。

心ちゃんとよく聞いた歌を流して、あたしは2人掛けのソファーの右側に座つた。もう左に座つてくれる人はいないのにね。ソファーの横には2人で苦労して取つた、ぶたのぬいぐるみが置いてある。あの時2人とも意地になつて、JFTOキャラにとんでもなくお金を使つたね。あれはまだ付き合つて1年の頃かな。あたしはぬいぐるみを膝の上に乗せ、じつと睨み合つた。

「お前は可愛いね。」ぶたの鼻を人差し指で押しながら、あたしはそう言った。独り言だなんてちょっときてるよね。うなだれてため息を着いたあたしは、テーブルの下に潜んでいた灰皿に気がついた。心ちゃんが使つていた、青い灰皿。そつと手を伸ばしてテーブルの上に置く。心ちゃんが忘れて行つた、心ちゃんの愛用品。まだ長いのに消されてる煙草もある。心ちゃんもあたしのことを考えて、苦しくて、こんなに沢山煙草を吸つたのかな。心ちゃんだつて悩んだよね。辛かつたよね。そう、信じていよいね？

あたしは化粧ポーチの中から、ずっと入れっぱなしにしていたライターを取り出した。初めてラブホに行つたとき部屋にこれが置いてあつて、思い出についてあたしがもらつたんだよね。心ちゃんが煙草を吸う女嫌いだつて言つてたし、あたしはライター使うタイミングなんてなかつたんだけど。

あたしは心ちゃんの吸いかけの煙草を手に取つた。心ちゃんが傍にいた頃はごみにしか思つてなかつたのに…心ちゃんがいなくなつた途端、こんなものまでが愛おしく宝物のように思えてしまう。煙草

をくわえ、思い出のライターで火を付けた。煙草の吸い方なんてわからぬけど、無償に吸いたくなつたの。心ちゃんが吸つたこの煙草を。

「つこほ。…まず。」

少しむせて、すぐに口元から煙草を離した。灰皿に煙草の灰を落とす。段々その指が心ちゃんのものに見えてきた。太さも色も全然違うのにね。あたしの頭の中が心ちゃんでいっぱいになつてるせいだね。

あたしの手元からただ真つすぐ上に煙が流れる。それをぼーっと眺めてただけなのに、涙が溢れてきた。

心ちゃんの匂いが体中を包んでくれる。でも、足りないよ。心ちゃんに触れないもん。心ちゃんの声が聞けないもん。

その煙草が短くなるまで、あたしはむせながらも吸い続けた。煙草を持つ自分の手を心ちゃんの手に重ねて。煙の向こうに心ちゃんを想像して。ただひたすら泣きながら煙草を吸つた。

短くなった煙草は灰皿の上でしばらく飾られた。ハイライトメンソールの煙草の匂いが部屋中に充满していた。

いつも聞いていた2人の思い出の曲は、よく聞けば別れの歌に聞こえた。

あたしは今まで生きてきた中で、死にたいと思つたことは一度もなかつた。

それはあたしの性格の象徴でもあつたし、生きていればいつかいいことはあるつて信じてるから。

でも、その生きてる時間が苦痛なんだよね。

だから逃げたくなる。

よく、フラれて自殺する人がいるけど、今はよくその気持ちがわかるや…。まあ、あたしは一生自殺なんてできないと思うけど。…だつて、あたしが死んだら心ちゃんが後ろめたい気持ちで、辛い人生を送ることになるから。心ちゃんには幸せになつてほしいから、あたしは我慢する。心ちゃんが傍にいなくて苦しくても、我慢する。それがあたしの愛だ。

どうしてこんなに好きなのにって、考えれば考えるほど自分が醜い人間になつてしまいそうで嫌だった。

まるでストーカーみたいな自分。

心ちゃんとの思い出をまだ何一つ消せていない。

心ちゃんから貰つた指輪も、2人で撮つたプリクラも、心ちゃんから送られてきたメールも、全て消せないまま。

友達に散々説教してきたくせに、実際自分がフラれればこうだ。そんなに簡単に思い出を消せるわけがないんだよね。それどころか、あたしなんて吸わない煙草を買ってはお香みたに煙を出して、心ちゃんが付けていた男ものの香水を買って…本當くだらない。その匂いがないと生きていけないなんて、あたしはちっちゃな人間だ。心ちゃんと別れてから2週間が経ち、ようやく現実を見始めた自分。まず、今のバイト先を辞めることにした。こここの家賃を払っていくには、もう少しお金が必要だつたから。居酒屋でバイトしようかなと思つてゐる。本当はキャバクラとかでもいいんだけど、心ちゃんが

嫌がつてたのを思い出して辞めた。別にもう心ちゃんの彼女ではないから、関係ないんだけど。

そして今日、4ヶ月ぶりにすずからメールが来た。すずの名前を見ただけで、胸が痛くなつた。直りかけの傷に塩水でもかけられた気

分。恐る恐る開いたメールの文章は簡単だった。

『会つて話したいことがあります。』

あたしは痛む胸を押さえ、携帯を閉じた。

第15話・大好きだから

地元の駅の近くですすと待ち合わせた。それはすずを許すためじやなくて、嫌味の一つでも言つてやるうと思つたから。シカトしよつと思つていたメールに返事を送り、それから1週間後の今日、会うことになつたのだ。

あたしは車を持つてないから、電車でここまで来た。ガタンゴトンと揺られながら、沢山の嫌味を考えて。

「…久しぶりです。」

待ち合わせ場所に先に来ていたのはすすで、あたしを見つけるなりそう言つて深々と頭を下げた。こんな他人行儀なすずを見たのは初めてだ。いつも馬鹿ばっかり言つて、天然系の女だったのに…これは2人の関係に大きなひびが入つた証拠だ。

あたしは黙つてすずに近寄り、すずが頭を上げるのを待つた。すずが泣きそうに震えていることには気付いたけど、あえてなにも言わなかつた。だつて、泣きたいのはあたしの方だから。

「…いい加減、止めてよ！話したいことあるんぢゃないの？」

痺れを切らしたあたしは、そう言つて近くのベンチに座つた。その時自分の薬指の指輪が口に入った。…そういえば、いやがらせのつもりで、心ちゃんから貰つた指輪を付けてきたんだつけ。あたしは自然とその手を後ろに隠した。こんなことをやつてる自分が惨めに感じたから。決して、すずが可哀相だと思つたからぢゃない。

「…ごめんなさい。」

よつやく発したすずの言葉にあたしは怒りが沸いて來た。あたしは謝つてほしいわけぢゃない。…じゃあ、どうしてほしいの？そう聞かれると、答えられないけど。

「なんで謝んの？だつたら返してよー。」

そんなこと言つたつて無意味なことはわかってる。心ちゃんは物ぢやない。あたしたちがいくら言い合つたって意味の無いこと。でも、

言わずにはいられなかつた。そんな弱々しい想いなら、心ちゃんをあたしに返してほしいと、素直に思つてしまつたから。

「…『』めんなさい。それは出来ない。」

「…なんで？ 心ちゃんのこと本当に好きなの？ フラれて悲しいから、心ちゃんの優しさを利用するだけだよ。」

「…酷いことを言つてるとわかつていただけど、止められなかつた。だつてこの怒りや悲しみをぶつけなきや、あたしはすつと一人で苦しむだけでしょ？ …でも、言いたいことを言えば言つほど胸が痛む。なんで？ …なんですつきりしないの？」

「あたし本気で好きです。ちかたんの彼氏じゃなければって何度も思つた。諦めようとも思つた。でも、あたしには必要な人だから…」そう力いっぱい言つたすずの瞳には、今にも溢れ出しそうな涙があつた。思わずあたしは視線を外した。苦しくて苦しくて息をするのが精一杯。

「…わかつてゐる。すずが心ちゃんを本当に好きだつてことくらい。そして、それと同じくらいあたしを好きだつてこと。だから、すずも悩んだんでしょ？ そんなの瘦せ細つた身体を見ればわかる。…わかつてゐるよ。わかつてゐるけど…なんで心ちゃんなの？ なんですずまであたしの必要な人を必要とするの？ 心ちゃんじやなかつたら、死ぬほど全力で応援するから… 心ちゃんは譲つてよ…。」

「あたしだつて、心ちゃんが必要なの。…なんかの間違いだつて言つてよ。すずとは戦いたくなかった…。」

「…だつて負けるつてわかつてたから。すずの泣き顔を見たら、あたしはきっと勝てないとわかつてていたから。だつて、あたしはすずのことも大好きなの。」

「…もう、昔みたいに仲良くは出来ない。正直、すずの顔を見たくはない。…悲しくなるから。だから、遠くで応援してる。幸せになつて。…あと、心ちゃんを幸せにして。」

そう言って、あたしは大きく息を吐いた。…あれ？ すつきりした。気持ちが晴れてきた。…悲しさはちつとも減らないけど。

「あ、あたしこれが言いたかったんだ。悲しいけど、辛いけど、大好きな2人だから応援するよって…そう、言いたかったんだ。

「あと、これ…」

あたしは薬指から指輪を外し、すずに渡した。

「嫌がらせのつもりだったんだけど…心ちゃんに返してて。てか、すすぐどっかに捨てちゃつてもいいし。」

すずは指輪を受け取ったものの、辛そうにそれを見つめた。

「でも、これは…」

「持ってるだけ辛くなるし、返しそびれただけだから。もう、いらない。」

あたしは俯いて首を横に振った。きつぎりのとじりで涙を堪えている自分に、気付いてほしくなかつたから。あたしは平氣だつて見せ付けないとね。だから、今は絶対泣かない。

「じゃあね。」

最後はしつかりとすずの顔を見た。もう、ボロボロに泣き出していくすずは、何も言わずにあたしを見送つた。きっと、あたしを思つて泣いたんだろう。だから、その涙に免じて…いつか笑つて会えるようになん張るよ。

何も付けてない薬指はやけにスースーする。

帰りの電車の中で、離れていく地元を見ながらそつと泣いた。

「…ばいばい。」

会おうとすれば会える距離にいる。心ちゃんが携帯を変えていなければ、連絡だつて取れる。そういう状況は余計辛かつた。煙草をやめたくてもやめれない人は、ぐだぐだこうやって悩むんだろう。手の届く距離にいるのに触れちゃいけないなんて、地獄だよね。

何度も電車に乗りかけたし、何度もメールを送りかけた。もしかしたらつていろんな期待をして。

でも、あの日すずと会ったときに、もう決心したことだから。応援するつて口にしてしまったら、もうあたしが心ちゃんを好きでいてはいけないということ。あたしは第三者なんだから。

心ちゃんとの思い出が詰まった部屋は、居心地がいいようどとも苦しかった。だけど、あたしはここから離れられない。麻薬中毒の様。

誰か助けてつて何度も叫んだけど、そんなの無意味で…だつてこの痛みや苦しみは心ちゃんじやなきや取り除けないものだから。あたしには泣くことしか出来なかつた。悲しい気持ちを形にして身体の外に出すことは、少しだけ効果がある気がした。まだまだ心ちゃんを思う気持ちは消えそうにないけど、少しずつ悲しみが和らいでいくべきいいな。

今日は居酒屋で初のバイトの日だつた。店長さんが優しいから、安心して仕事が出来るけど、周りの人と仲良く出来るかは心配だつた。女の人はみんなギャルっぽいし…あたしみたいなのしょぼいつて馬鹿にされてそひ。まあ、見た目で判断するのはよくないよね。

それに夜に働くのはあたしにとって、都合のいいことだつたかもしれない。真っ暗な夜はやつぱり寂しさも増してしまつから、夜は賑やかな場所に居た方が楽。無駄に泣かなくて済みそつ。

…そして、あわよくば、心ちゃんを忘れられる出会こがあればいいな。

第17話・月が照らす道

「ちかこさん、でしたつけ？」

皿洗いをしていたあたしに、後ろから声をかけて来たのは笑顔がかわいい男の人だった。まだ、名前はわからないけど。

「あ、はい。」

「一服つす。」

「あつ、はい。」

あたしは慌てて濡れた手をタオルで拭い、その人の後に続いた。やつぱりバイトの初日って気を使う分、すぐに疲れてしまう。いいタイミングの休憩だ。

休憩室は窓が開いていて、扉を開けた瞬間風が吹き抜けた。その時、ほのかに香ったのだ。前を歩く人から心ちゃんと同じ香水の匂いが。思わずドキッとした。後ろ姿もなんとなく似ている。そう、思い込んだだけかもしれないけど…。

誰もいない休憩室は異様に静かで、少し緊張してしまつ。丸いテーブルを挟んで、あたしとその人は向かい合つて座つた。

「あ、煙草平氣ですか？」

「あ、大丈夫です。」

あたしはそう言ってぶんぶんと手を振つた。なんだか大袈裟なリアクションで答えてしまつた気がする。その人はあどけない笑顔を見せて、煙草に火をつけた。ああ、煙草つてこうやって吸うんだよなあつて、改めて思つてしまつ。だつてあたしはお香みたいに煙りを出してるだけだから。

「ちかこさんつていいくつつすか？」

「あ、21。」

「えつ、3つ上？！」

男の人びっくりしたので、テーブルに一欠けら煙草の灰が落ちた。つていうか、あたしもびっくり。この人、3つも下なんだ。笑顔は

確かに可愛いけど、煙草を吸つてる姿はあたしより年上だって言わ
れてもおかしくないくらい、大人っぽい。

「あれっすね。童顔ですね。」

「…よく言われます。」

この人意外とデリカシーのない人だなあ。あたしは口元を引き攣ら
せて、無理矢理笑顔を作つた。そりやあ、よく子供っぽいって言わ
れるけど、そろそろ大人の魅力つてものに気付いてくれる人が現れ
てもいいんじゃないだろうか。

「あ、そういうえば俺の名前知つてます？」

「あ…ごめんなさい。まだ…。」

そう言つてあたしが申し訳なさそうに俯くと、男の人は気にしない
で、と笑つた。

「山下大樹です。たぶん、これから一番一緒にいることになると思
います。」

「へ？」

山下さんの言つてる意味がわからず、あたしは氣の抜けた声を出し
た。

「親父がちかこさんのこと氣に入つてて。あ、親父つて一応ここの
店長で。で、俺の彼女にしようつてたくさんでるんすよ。ちかこさ
んに甘いでしょ？うちの親父。」

確かに言われてみると他の人よりは優しくされてる気はするけど…
氣に入られてるのかな？

「親父あんまりギャルっぽいの好きじゃないんすよね。みんない
い人なんんですけど。」

「いい人なんだ。じゃあ、安心です。」

あたしはほつと胸を撫で下ろした。とりあえず、店長と山下さんと
は仲良く出来そうだし。…まあ、それはそれで面倒臭しだけど。
その日、月は真っ暗な夜道を照らし、まるであたしの進むべき道を
表してくれてるようだった。

あたしにとっては、時間は流れているよつで止まっていた。自分の周りが時の流れで変化していても、あたし自身は何も変わっちゃいない。あたしは心ちゃんがまだ好き。

あれから半年が過ぎ、悲しみは少し和らいだと思つ。寂しさに馴れてしまつただけのかもしれないけど。

もう、気がつけば季節は夏を迎えていた。

「ちかちゃんって身長いくつあんのー？」

居酒屋のバイト仲間の香はあたしの横に立ち、背比べした。居酒屋でのバイトも最近は楽にならなくなってきたし、何よりもここの人達と仲良く過ごしていると思つ。香は見た目は一番怖いけど、話してみるとすごく優しくて、面白い人。女の子の中では一番気が合うかもしない。まあ、みんない人なんだけど。

「マジ、ちっちゃんよ。」

「香がでかいんだよ！」

「いや、ちかちゃんはちっちゃんよ！」

「そんなことないよ！」

そななあたしの必死の訴えに、みんなは手を叩いて笑うばかりだ。一応あたしが一番年上なのに…なんだかみんなに馬鹿にされっぱなし。まあ、これがみんなの愛情表現だと受け止めよう。

…ひつやつて毎日を過ごしていると、心ちゃんと別々の人生を歩いているんだなあって実感する。あたしが新しい出会いをしているとき、心ちゃんもきっと誰かに出会つてゐる。お互いの毎日を知らずに生きていいくことは、やっぱりあたしにはまだ辛い。

すずとは仲良くやつてるの？相変わらずあそこで働いてるの？今は実家に住んでるの？ペットの猫は元気にしてる？当たり前にわかつていた心ちゃんの毎日。心ちゃんの全て。今はこんなくだらないことまでも、あたしの知らない世界になつてしまつたんだね。

正直、あたしの知らないところで、幸せな人生を送っていると考えるのも少し悲しい。まだそこまで大人になれないのも事実。やつぱり心ちゃんには、あたしとの人生の中で幸せになつてほしかつた。

「ちつこい、ちつこい。」

突然現れて、あたしの髪をくしゃくしゃにしながら言つたのは大樹だつた。あの時の大樹の言つた通り、店長はあたしを気に入つてゐらしく…大樹とあたしをくつつけようという意味不明な計らいのせいで、あたしは1番大樹と打ち解けたと思う。大樹も今はあたしを馬鹿にしてばっかりで、可愛いが無くなつてしまつた。

「ちつこいんだから、ちかこじやなくて、ちこじやん。」

大樹はあたしを馬鹿にしてそう言つたけど、あたしは怒ることも笑うことも出来なかつた。だつて、あたしのことを『ちこ』って呼ぶのは心ちゃんだけだつたから。心ちゃんも、大樹とまつたく同じ発想だつた。今みたいにちつこいつてあたしを馬鹿にして、それからずつと『ちこ』って呼ぶようになつて…でも、もうそんな風にあたしの名前を呼ぶ人なんていないと思つてた。

心ちゃんが最後だと思つてたんだ。…最後にしたかつた。これから的人生で、心ちゃんとのいろんな思い出は、きつと塗り替えられてしまうだろう。でも、あたしの人生の中で『ちこ』って呼んだ人は心ちゃんだけだつたなあつて、おばあちゃんになつたときそういうたかつたの。心ちゃんだけの特別な記憶を一生忘れたくないよ。

「ちか?」

そんなことを考えていたあたしは、今にも泣き出しそうな顔をしていたんだろう。大樹は心配そうな顔であたしを覗き込んだ。

「そ、そのあだ名は馬鹿にしてるから無しね。」

あたしは一瞬で気持ちを切り替えて、怒つた風にそう言つた。

「なんだ、怒つてんの?」

「別に怒つてないよ。とにかくそのあだ名は無し。」

あたしが冷たくそう言つと、大樹はつまんなそうに口を尖らせた。

「…ちえー。」

第19話・蟹とりたい！

みんなで海に行こう、と言に出したのは香だった。確かにいい天気が続いているし、海に行くにはちょうどいい頃かもしね。お店の定休日があるから、だいたいみんな出席出来るだろう。あたしもみんなと海に行くことにした。

運転は小鷹君と大樹。バイトの中で精神的に大人な2人だと思う。女の子3人、香と千秋ちゃんとあたし、それからバイトの中で一番やんちゃな匠は2手に別れて乗った。

大樹の車に乗ることになったのは、あたしと匠。

車の中はびっくりするほどテンションが高くて、笑いが止まらなかつた。目的地の海に着くまで1時間くらいかかつたと思う。でも、全然時間なんか感じさせないくらい、あたしも2人も笑い続けた。おかげで車酔いするあたしは、酔い止めを飲み忘れたにも関わらず、ちつとも気持ち悪くならずに済んだ。大樹の運転が意外に優しかつたっていうのもあるかもしれないけど。

目的地に着いて、周りを見渡すどこか懐かしい感じがした。あ、ここは心ちゃんよく来た海だ。滅多に泳ぐことはなかつたけど、蟹を探したりヤドカリを捕まえたりしたつけ。…やだなあ、こんなどこにも心ちゃんの思い出が詰まってるんだ。せつかくみんなで楽しもうって時に、少しきくなつちゃつた。

男女別々になり水着に着替えると、あたしたちは大はしゃぎで海に向かつた。小鷹君と匠はおつきなイルカの浮輪を脇に挟んで、海に入つていく。香と千秋ちゃんは、それに乗りたいとあとをついて行つた。あたしは昔海で溺れかけたことがあって、未だに深いところまでは入つていけなかつた。だから、心ちゃんとはよく砂場で遊んだんだよね。

「入んねえの？」

「あたしあんまり泳げないんだよね。」

情けなさをうにあたしが言つと、大樹はあたしの背中をドンと押した。

「わっ。」

急な出来事でバランスが取れなかつたあたしは、波打ち際にひざまづくように倒れる。

「危ないじゃん！」

「こんなとこじや溺れねえよ。」

大樹は馬鹿にしたように鼻で笑つて、座り込んでるあたしの腕を引き上げた。

「足着くとこまでなら入れんでしょう？」

「…うん。」

不安そうに返事をするあたしの腕を、大樹は放さなかつた。なんだかんだ言つて、大樹は面倒見がいって言うか…こういうときに少し大人に感じてしまう。

「俺、ちかの面倒見役つてみんなに言われてつから。」

「別にみんなんとこ行つていいよ。かき氷でも食べて待つてるから。」

「そしてあたしも可愛いげない。本当はありがとうって言いたいんだけど…年上の性つていうやつ？こんなところで一人にされたら、いろんなこと思い出して泣いてしまいそう。実際、さつきから『ちこ』つて心ちゃんが呼んでる気がして、馬鹿みたいに振り返つたりしてる。頭の中何度も心ちゃんの声が響いてるんだ。」

「ちかがいなきやつまんねえだろ。からかう相手いねえんだから。」

「はいはい。」

「大体、あいつら付き合つてるみたいなもんだし。」

あつさりと言つてのけた大樹の言葉に、あたしは敏感に反応した。香と千秋ちゃんが小鷹君と匠を好きなのは知つてたけど…両想いだつたの？！

「知らなかつたの？」

「知らないよ！」

「男どもは今日が決め時だと思つてゐるよ。」

「そなんなんだあ…。」

そんな大事な行事だつたんだ。どおりでみんなテンション高すぎるわけだよね。みんな幸せになれるといいね。なんだかあたしまで嬉しくなつてきた。

「だから、邪魔者は脇にいないとね。」

「意外と氣い使うんだね。」

「当たり前でしょ。」

少しむんつけたように言つた大樹は、あたしのおでこにド「ポンをした。

：きつと端から見たら、あたしたちも付き合つてゐるように見えるんだろうな。そりや、客観的に見て大樹はかつこいいと思うし、生意気なところもあるけどまあ、いい奴だし…こんな人が彼氏だつたらいいのかもしないけど。もし、心ちゃんに出会つてなかつたら、きつとあたしは簡単に落ちてるだろう。でも、今は誰を見ても心ちやん以上に思えないんだよね。まだまだ恋は出来そうにないや。

「なんか違うことする? カキ氷とかほんとに食べてえの?」

食いたい気はするけど…。うーん、とあたしは悩んだ。そして結局こう。

「蟹とりたい!」

第20話・絵の具

沢山の人で賑わっている砂浜から少し外れた場所で、あたしと大樹は蟹を探していた。ここはちょっとした岩場になつてて、沢山見つけられるのをあたしは知つてゐる。だって：心ちゃんが教えてくれたから。

「蟹なんかいねえよ？」

「いるつて。ほら、こここの隙間2匹もいる。」

「あ、マジだ。」

大樹はあたしが指差した隙間に顔を近付け、木の棒で突き始めた。

「ねえ、それ蟹死なない？」

「死ぬわけねえだろ。」

「素手でいきなよ。」

「挟まれんのやだ。」

心ちゃんは蟹が可哀相だからって、そんな手荒にしなかつたんだけどな。あたしは大樹から少し離れた場所でヤドカリを探すことにした。ヤドカリは怖くないから、あたしでも捕まえられる。隙間をじっくり探していると、小さなヤドカリが歩いているのが見えた。

「逃げないでね…」

あたしはそおつと貝殻を摘む。

「やつた！しん…」

…思わず言つてしまつた。ここに心ちゃんはないのに。

『心ちゃん捕まえたよ』つていつとも叫んだんだ。そしたら、遠くで蟹を捕まえて心ちゃんが近寄つて来てあたしを褒めてくれる。帰る頃には、バケツの中に2人でとつた蟹とヤドカリが沢山いたよね。

…心ちゃん。あたし、一人でヤドカリ捕まえたよ。もう、褒めてくれないの？頭撫でてくれないの？心ちゃん、ヤドカリ大好きじやん。

『ちこ、偉いなあ』つて言つてよ。

力の抜けたあたしの手から、ヤドカリはゆっくりと逃げて行った。

座り込んだ自分の膝に涙が落ちる。

…駄目だ、心ちゃん。

やつぱり3年は長いよ。

どこに行つたつて心ちゃんとの思い出が溢れてるよ。何度も心ちゃんの幻が目の前を通り、心ちゃんは違うの？あたしとの思い出を、次の思い出で塗り替えてしまったのかな。あたしには心ちゃんとの思い出が濃すぎて、塗り替えても塗り替えてもまた浮き上がりてくる。心ちゃんとの思い出を塗り替えられる絵の具なんてどこにもない。

「ちか？」

近付いてくる足音が聞こえる。大樹に変に思われるから、泣き止まなくちゃ。…でも、ここに心ちゃんがいてくれたらって、考えちゃうから。やつぱり涙は止まんない。

「何した？こけた？」

ただひたすら泣き続けるあたしは、大樹の問いかけに首を振ることしか出来なかつた。

「蟹にやられた？」

「ちがつ…」

「…帰るか。」

大樹は泣いてるあたしを引つ張り起こして、ため息をついた。きっと面倒だと思つたんだろう。

大樹はあたしの手を引いて、香たちのいる浜辺へ向かつた。すれ違う人があたしたちを見る気がする。喧嘩したカップルのようにでも見えるのかな。大樹、きっと恥ずかしいだろうな。

「ここで待つてられる？俺、みんなに言つてくるから。」

「あたし、大丈夫だから。大樹、みんなといついいよ。」

まだ少し泣きながらそう言つあたしに、大樹はげんこつをくらわせた。

「ちかの嘘つてすつげえ見え見え。嘘つくなら、もつとうまくつ

てくんない？」

年下に見透かされるなんてなんだか恥ずかしい。あたしより大樹のほうが何倍も大人だな。

「だから、待つてて。」

「はい。」

今度は素直に返事をすると、大樹はみんなのもとへ走って行つた。あたしはいつも、なんだかんだ大樹に助けられてる。お礼の一つくらい素直に言えたらしいのに。

可愛くないな。

第21話・そういえば

帰りの車の中で、大樹はあたしに何も聞かなかつた。ただ、来たときよりも音楽を大きく流して、それに合わせて鼻歌なんか歌つたりしていた。会話がなくてもおかしくない状況を、大樹はうまく作つたんだと思う。でも、そんなさりげない優しさがあたしにはわかつてしまふんだ。口に出したら恥ずかしがると思うから、言わなかつたけど。

正直、『どうしたの?』って聞いてほしい気持ちも半分あつた。あたしは一人で苦しんでるんだつて、可哀相な女なんだつて誰かにわかつてほしかつた。そして、同情でもいいからあたしを甘やかしてほしかつた。『頑張つてるな』って誰かに褒めてほしかつたんだ。だつて、一人じやくじけてしまいそうだから。もう一度大きな愛情に包まれて、静かに眠りたかつた。誰かの優しさに甘えていたかつた。そんなのいいことじやないつてわかつてるけど。

次の日あたしはバイトを休むことになつた。大樹がみんなに『体調悪くなつたみたいだから』って嘘をついてくれたらしく、その手前普通にバイトに出るのはちょっとと氣が引けた。大樹もそれをわかっていたから、あたしとシフトを交換してくれたのだ。お世話になつてばかりで、本当に申し訳ないと思う。

急に休みになつたおかげで、あたしはなにもすることがなく家でぼーっと過ごしていた。

夕方近くになつて、香からメールがきた。

『体調大丈夫?』題名にそう入つている。今日休むことを今知つたんだろう。『昨日ゆつくり休めた? 今日会つたら報告したいことがあつたんだ。』その先はなんとなくわかつた。『休みみたいだから、メールで報告。昨日から小鷹と付き合つことになつたよ!』予想していた通りの内容だつた。昨日大樹が言つていたことは、本当だつたらしい。あたしはすぐに『おめでとう』のメールをした。それか

ら数分後、千明ちゃんからもメールが届き、「ちらもつまくいったことが報告された。

みんな、幸せになろうね。そんなことを考えながら、ふと大樹の顔が浮かんだ。そういうえば大樹は誰か好きな人いないのかな。みんなで幸せになりたいから、大樹の応援もしたいけど…何しろ大樹の好きな人なんて聞いたことない。いつもお世話になってる分、恩返しあなくちゃ。

お節介つて思われなきゃいいけど…。

第22話・わかんの。

「で?
「は?」

休憩に入るなり大樹に詰め寄つて問い合わせたあたしに、大樹は当然迷惑そうにそう言った。

「『は?』じゃなくて。好きな人いないの?」
「何、突然。嫌な予感するんだけど。」
「何でよ…」

「協力する、とか言いつんじょ。」

大樹は煙草に火を付けて、眉間にシワを寄せた。何でこんなに迷惑そうな雰囲気を醸し出しているんだろうか…。

「いないの?」

「…いるよ。」

意味深な表情でそう言つと、大樹はあたしに煙りを吹き掛けた。

「ちょっと!」

あたしは手で仰いで煙りを大樹に返した。…今の表情はなんだろう。「本当にあたし協力するよ?お世話になつてる、お礼つていうか…。

「いらねえし。そんなこと言つない、もつとしつかりしろよ。」

「うつ…。」

まあ、確かにね…。あたしは何も言えなくなり、ただ俯いた。結局大樹には敵わない。

「ちかつてほんと単純だな。みんなが付き合つたから、俺もつて思つたんだろ?」

あたしは一つ頷いた。

「安心しろよ。とうぶん、付き合つつもりないから。」

「…何で?」

「誰でもいいわけじゃないし。」

「好きな人いるんでしょ？」

ちらつと目をやると、大樹は困ったような顔をして窓の外を見ていた。

「それが脈無しだから。」

「そんなのわかんないじゃん。」

「わかんの。」

呆れたようにため息を着いた大樹に、あたしは少しそうとした。あたしは行動する前から諦める人間が嫌いだから。

「何で？」

「好きだから。」

そう力強く言つた大樹の言葉にあたしは息を飲んだ。本当に好きなんだと、その言葉で伝わつて来たから。あたしも心ちゃんを本当に愛してたから、心ちゃんの気持ちがわかつた。大樹もそんな感じなのかな。

「別に俺、長期戦でいくつもりだし、気にすんなよ。」

煙草の火を消して、立ち上がる大樹が今までよりも男らしく見えた。あたしもくよくよしてらんないなあ。

第23話・友達

夏の暑さも和らいだ9月末。

約1年ぶりに高校時代の友達と飲み会をすることになった。毎年このくらいの時期になるとメールが回ってくる。仲良しだった同じ部活の友達。中には結婚した人もいるし、未だに恋をしたことのない人もいる。そんなみんなと人生について語るのは、すごく楽しい。まあ、そんな語れるほど年はとつてないけど。

でも、今日は別れたことを報告するめにならう。何せあたしは昔から嘘が下手だったから。

飲み会は地元でやることになった。卒業後地元に残った人が多いから、「こればっかりは仕方ない。地元はあたしの大好きな場所だつたけど、心ちゃんと別れてから、行きたくても行けない場所になつた。あそこに行つたら、あたしはきっと無自覚に心ちゃんの姿を探すだろう。」2人並んで歩いてる姿はなるべく見たくないけど。

「かづみー！久しぶりい。」

「あー、ちかあ。元気しつた？」

学生時代、1番仲の良かつたかづみが駅まで迎えに来てくれた。

「…かづみ痩せた？」

「わかる？ちょっとダイエットしてんの。」

かづみはニッコリ笑つてそう言つたけど、それが嘘だといふことはすぐに気付いた。

もともと、ダイエットをするような子じゃなかつたし、いつもの笑顔と違かつたから。この歳になつて、友達に相談するのが恥ずかしいのだろうか。それとも、無駄な心配はかけたくないと大人ぶつてるのだろうか。どつちにしろ、あたしにはかづみの嘘が気に食わなかつた。何があつたのか、はつきりはわからないけど、おそらく彼氏がらみだと思う。

「…かづみ。あたし心ちゃんと別れたんだ。」

「えつ？」

かづみはびっくりした表情を見せたけど、すぐに笑顔を取り戻した。

「嘘でしょー？」

本当にあたしの告げた事実を、かづみは嘘だと思つてるんだね。あたしたちをよく知つていたし、あたしが結婚すると言つていたのもわかつてるから。

「嘘じやないよ。」

少し困つたように言つたあたしに、かづみは表情を曇らせた。

「ほんとに…？」

「いろいろあつたんだよ。」

「え、だつて…考えらんないよ…」

かづみは泣きそうになりながら、震えた声でそう言つた。きっとあたしの声のトーンで、心ちゃんから離れていったと察知したんだろう。

「…大丈夫？」

かづみの問い掛けにあたしは首を横に傾けた。大丈夫な気もするし、そうでない気もする。でも、別れた頃に比べればだいぶマシになつたかな。

「…あたしもね、涉と別れたんだ。」

「…そつか。今日は語り合えそうだね！」

あたしはかづみと手を繋ぎ、腕をぶんぶん振つて歩き始めた。まるで子供の頃に戻つたみたいにはしゃぐあたしに、かづみもつられて笑つた。20を過ぎた大の大人が、手を繋いで歩くなんて少し恥ずかしいけど、これも友情つてことでありでしょ？

「…聞いてもいい？」

「いいよ。」

かづみが何を聞きたいのか、あたしにはわかつてた。でも、とても言いすらそうにしているので、あえてあたしはかづみの言葉を待つことにした。

「…まだ好き？」

「…今はね。」

「いつ別れたの？」

「2月。」

「そつかあ。」

その後少し沈黙が流れて、かづみは立ち止まつた。きょとんとした顔でかづみを見ると、かづみは大きく息を吸い込んだ。

「会いたい？」

今回の質問は超難問だつた。余計な考えを省いて、素直な気持ちで答えるなら…会いたい。でも、会つてどうなる？心ちゃんはもう違う人生を歩んでる。その姿をまじまじと見たつて悲しくなるだけ。何も話すことは無いし、普通に話せる自信も無い。会いに行つたら、忘れるのが遅くなるだけだ。

「…あたし、ちかの気持ちよくわかるよ。どちらを選んでも後悔すると思う。だから、一番正直な気持ちを選んでもいいんじゃないかな。」

どっちを選んでも後悔する…確かにその通りかもしれない。かづみは涉君に会つたのかな。でも、あたしには会つて話しきをするとか、そんなこと考えられない。心ちゃんがどれだけ悩んであたしと離れたかわかつてゐから、気安く会いに行つたり出来ない。心ちゃんが困るのが目に見えてわかる。でも…やつぱり…

「…遠くから見るだけでもいい。心ちゃんをもう一回だけ見たい。…ついて来てくれる？」

不安そうに問い合わせたあたしに、かづみは

「いいよ。」

と笑つた。

第24話・見納め（前書き）

更新遅れました……つてのも、訳がありましてつ（○^▽^）○
実は食中毒で寝込んでたのです！いやあ、辛かつた…もお元気です
ケドね また、更新頑張ります（・）皆さん応援していただけ
たら嬉しいです！感想なんかもいただけたら…お願いします！！

緊張で頭がどうにかなってしまった。かづみと繋いでいた手は、じつとりと汗ばんでいた。

「そんなに強く握んなくとも離さないから。」

かづみはそう言つて笑顔を見せてくれた。…心ちゃんを見たいけど、見るのが怖い。びくびくしながら、一度も仕事場に顔を向けず、ただかづみが導いてくれる道を歩いた。

「ちょっと！見つかるから！」

あたしがあまりにびくびく歩いていたせいが、かづみはあたしの手をおもいつきり引っ張りながら、そう言つた。だって、思ひょうこ足が動かないんだ。あたしが悪いんじゃないよ？

「ここから辺から見れば、大丈夫じゃない？」

ここなら調度よく木とか看板で隠れられる。
ここからひとつそり覗くのかあ…ストーカーみたい。ちょっと気が引けたけど、あたしはそっと仕事を覗いた。心ちゃんの姿はすぐに目に入った。どんなに遠くにいたって、どんな人込みの中にいたって、あたしは必ず一番に心ちゃんを見つけられる自信があるから。例えこの目が見えなくなつても…感じるんだ、心ちゃんの呼吸。

「いた？」

隣から同じ様に覗いているかづみに、あたしは

「うん。」

とだけ言つた。心ちゃんは髪の毛を思い切り短く切つていた。心ちゃんのあんな髪型を見たのは初めてだった。…短いのも、よく似合うんだね。

少し痩せたかな？髪型のせい？ぱーっとしてる…元気ないのかな。心ちゃん、今どんな毎日を送つてゐるの？ちゃんと幸せ？笑つて過ごしてゐ？やっぱりあたしには心ちゃんが全てだから、心ちゃんが幸せじやないと悲しいよ。今のあたしには、心ちゃんを幸せにする力

なんてとてもないけれど。

：声が聞きたい。心ちゃんに触りたい。好きって言いたい。抱きしめてもらいたい。嘘でもいいからなんて思わない。…もう一度愛してるって言ってほしい。

見ちゃいけなかつたのかもしない。また一層好きになつた気がする。思い出した：心ちゃんの荒れた手や、子供に話しかけるみたいな優しい声のトーン。あたしを見つめる目。今でもこんなに愛しいよ。心ちゃんの全てが愛しいよ…。

あたしは何の為にここに来たんだろう。

どうして、諦めが鈍るようなことするの？好きだと、今でも愛していると、そう確認するだけだとわかつていたのに。

こんなの全然前に進めない。

でも…会いたかった。

会いたくて会いたくてしようがなかつたの。毎日苦しかつたの。愛してる人を見てみたい気持ちは、誰にだつてあるでしょ？それをお慢するのはすゞしく辛いんだ。…本当は、これから諦めなきやいけない人間は、この欲求に打ち勝たなくちゃいけないんだよね。違う道を歩いていくために。悲しいけどそれが現実なんだよね。これが見納め：かな。

力が抜けて座り込むあたしの頭を、かづみばずつと撫でてくれた。

第25話・背中を押して

後ろ髪を引かれる思いでの場を立ち去り、あたしかづみは飲み屋に向かつた。かづみは何も言わず、ただ手を握つて歩いてくれた。それが嬉しかつた。飲み屋に着く頃には、あたしもぱつりぱつりと話し始め、かづみも笑つてくれたりした。

…きつとかづみも別れた彼氏に会いに行つたことがあるんだだろ？。そしてあたしと同じことを思つたんだと思つ。

かづみもあたしも諦めの悪い女。まあ、良く言えば一途な女つてことでしょ？…なんて都合よすぎかな。

もちろんあたし達だつて、こんなところで立ち止まつてみたいわけじゃない。ただ、『ああ、この恋は叶わないんだ』ってわかつたから諦めがつくとか、そんな簡単じゃないだけ。心ちゃんがまたあたしを好きになつてくれるとか、戻つて来てくれるとか、そんな甘い考え、本当はどうに無くしてゐる。

だつてそんな期待何回も打ち碎かれて、その度に泣いているんだから。でも、期待なんかしてなくとも、好きといつ気持ちだけは残つてしまつて…どうしようもないから、理由が欲しくなる。『心のどつかでは期待してゐるから、諦めつかないんだよね』つて、そつゝまかすしかないんだ。

本当はちゃんとわかつてる。かづみも、あたしも。もうどんなに思つてもあんな幸せな日々は戻つて来ないつて。ただ人間の心が少し複雑に出来るだけなんだよ。だから、重たいとかしつこいとか、そんな風にとらえてほしくないな。…自分自身をそんな風に思いたくないな。

飲み会であたしもかづみも別れたことを暴露した。

ガンガンお酒を飲みまくつて…半分酔いに任せて。でも、みんなも酔つてるせいか、笑い飛ばされて終わりだった。悲しくはなかつた。別に同情してほしかつたわけじゃないから。こうやって笑い飛ばし

て『次はもつといい男見つける』って背中を押してもらいたかったんだ。だからあたしは泣くほど嬉しかった。言葉には出さなかつたけど、ありがとうってみんなに言つたんだ。

何回も何回も。

第26話・アッサー

「ここの、酔っ払いが！」

そう言って、あたしにげんこつを喰らわせたのは大樹だった。
「いたーい。」

ケラケラと笑っているあたしに、大樹は呆れてため息をつく。
「じゃあ、ちかのことよろしくです。」

かづみが大樹に頭を下げるとき、大樹も小さく頭を下げた。かづみは
あたしのお母さんみたいだね。

「ちか、じゃあねー。」

「まつたねえー！」

手を振るみんなに、あたしは人一倍大きな声で返事をし、ぶんぶん
と手を振った。そしてその手が大樹の肩に当たり…案の定、また怒
られた。

「早く乗れ。」

「…はあい。」

怒られてぱっかりのあたしは、口を尖らせてそう言った。

「だいたい俺、お前の彼氏でもなけりや、アッサーでもねえんだか
らな。」

「そんなんに怒らないでよお。電車なくなっちゃったんだもん。」

「そんな時間まで飲むな！」

「だつて、盛り上がりちゃったからー。」

最初は本当に、みんなより先に帰る予定でいたんだ。帰る電車がな
くなる前に。でも…飲み会だからね。…こういうのお約束でしょ？そ
んなこと言つたら、また怒られちゃうから黙つとくけど。

「俺来れなかつたらビーヴしてたんだよ。」

「誰か呼んだ。」

「他に呼べる奴いるなら、そっちに頼めよ…せつかくの休みだつた
のに。」

「だつて彼女いないの大樹だけじゃん。あたし彼女の反感買つのやだもーん。」

そんなことを言つたけど、本当は大樹しか思い浮かばなかつたんだ。こんなとき甘えられるのは大樹しかいないし、こんな迷惑なこと引き受けくれんのも、大樹しかいないと思つた。でも、さすがに今回は怒つてるかな。

「…なるほどね。まあ、いいけど、今度飯おじれよ。」

「かしこまりましたあ。」

あたしは大声でそう言つて敬礼をした。運転している大樹が迷惑そな目で、一瞬だけあたしを見る。酔つ払つてゐるんだから許せ。とか、思つてみたり…。

「…気持ち悪くねえ？一応安全運転してつけど。」

「…やつさしー。」

あたしはキラキラした田で大樹を見上げた。

「あ？」

「…大樹はいい男だねー。」

だから、つい甘えたくなる。大樹の優しさに心ちゃんの優しさを、たまに重ねてる氣がするんだ。心ちゃんと一緒にいた頃みたいな、甘つたれのあたしでも、大樹は愛想を尽かさず傍にいてくれそなから。…あたしつてずるい女だなあ。

「そう思つてんなら惚れろよ。」

「…？」

この時はまだ大樹の言つた言葉の意味が、よくわからなかつた。

第27話・キャンプ

「ちかつてまだ大樹と付き合っていないの？」

何の脈絡もなく突然そんなことを言われ、あたしは持っていた携帯を落とした。

「えつ、もう付き合ってんの！？」

「いや、付き合っていないから！」

「なんだあ…」

ため息を着くように香と千秋ちゃんは、呟いた。

「びっくりするじやん、急に…。」

「だつてさあ、いつつも一緒にいるのに何で恋に発展しないわけ？逆に疑問だよね。」

うんうん、と香の言葉に千秋ちゃんは大きく頷いた。やつぱり周りから見れば、あたし達も付き合ってるよう見えるんだろうなあ…。あたしはいいとして、大樹はきっと迷惑に思ってるだろう。それでも何も言わず傍にいてくれる。あたしの居心地のいい場所を与えてくれる。あたしは大樹の優しさに甘えてばっかりだ。「おら。喋つてねえで準備しろ。」

そう言つて後ろから大樹にどつかれ、あたしはまた携帯を落とした。何かと大樹はあたしを殴る。もちろん本気じゃないけど。さりげなくストレスを解消してるんだろうか。まあ、大樹の大半のストレスはあたしだろうから、反抗しないでおこう。

「はい、すみませーん。」

香と千秋ちゃんはそそくさと彼氏のもとへ。

きつと2人とも優しくされてるんだろうなあ。彼氏べつたりだし。この6人は仲良しだし、ショッちゅう遊んでも飽きないけど…あたしと大樹が残り者になるんだよね。誘ってくれるのはありがたいけど、こういう機会があればあるほど、あたしは大樹に甘えてしまう気がして嫌。今日のキャンプだって、前日まで断ろうかどうか悩ん

でたし。

「にしても、あいつら気合い入りすぎだる。」

「そりや、楽しみにしてたもん。」

「ちかは用事あつたとかじやねえの？」

「え？いや、ないけど？」

「なら、いいけど。お前来るのしぶつてたし、用事でもあつたのかと思つて。」

こういうとき大樹つて人のことよく見てるなあつて感じる。嘘が見破られるつて言うか、心が見透かされるつて言うか…そんな気がするんだ。

「大樹つて人のことよく見てるよね。」

「…俺が見てんのは、ちかだけだけどね。」

「えつ？！」

大樹が突然低い声でそう言つたので、思わずドキッとした。あたしは慌てて目を逸らす。

「ふつ。お前、勘違いしてんだろ？」

「べつ、別につ。」

「調子のんなよ。」

「乗つてないよ！」

…とは言つたものの、実際調子乗つてるのかも。

このままの関係が続けばいいと思つてる。大樹の恋を応援するとか言つておきながら、心のどこかではそれを否定してた。大樹が他の誰かのものになるのは嫌だ。別に今だつてあたしのものつてわけじゃないけど。もし、彼女が出来たらあたしの傍にいるわけにはいかないだろうし…そうなると少し辛いなあ。嫉妬とかそういうんじやなくて、ただ今のあたしには大樹の存在が必要だと思うから。かなり勝手なことを言つてるのはわかるけど…大樹の存在が、倒れかけてるあたしを支えてくれてるのは事実だ。

…やっぱりあたしつて人間はずるい。

第28話・変な期待

「じゃあ、うちら彼氏んとこ行くから。」

「へ？」

あたしは口をぽかんと開けたまま、立ち上がった2人を見上げる。

「お約束じゃーん？」

「大丈夫だよ。代わりに大樹が来るから。」

「えつ？いや、意味が…」

ちょっと嫌な展開になってきた。

「信じるのは馬鹿を見るんだよ？」

語尾にハートマークでも着いてるかのような可愛い口調で、千秋ちゃんは酷いことを言つてのけた。

「…それはまずいんじゃない？」

「まずくない、まずくない。」

「じゃあ、また、あ・し・た」

「やつ、ちょっと、待つて…」

香の服の裾をぐいっと引っ張つてみたものの、脅迫じみた2人の笑顔に圧倒され、あたしは仕方なく手を離した。

「ごめんねー。」

全く悪びれる様子の無い顔で2人はそう言い残し、部屋を出ていった。

「…」

んー…まいつたぞ？

あまりの急展開で話がわからないと思つので、軽く今の状況を説明致します。

今回のキャンプは別に本格的なものではなく（まあただ単にみんなで騒ぎたかっただけなので）内容は小学生の合宿みたいなものだった。もちろんテントなんかなくて、近くのペンションを借りていたわけで。事前にあたしが聞いていた話では、今回借りた部屋は2つ

で女部屋と男部屋に別れるつてことだつたんだけど…実際借りた部屋は3つで、恋人同士で過ごしましょつてことらしい。結局あまりものあたしと大樹が、同じ部屋で過ごすことになつてしまふんだけど…うちらは決して恋人同士じゃ あない！香も千秋ちゃんもいくら自分がラブラブしたいからつて、こんなの酷すぎる。鬼だ…。いくら相手が大樹だつていつても、やっぱり男の人と一晩中2人きりで過ごすのは緊張する。そんなことより、こんなに緊張することが大樹にばれたら…徹底的に馬鹿にされるに違ひない。どうにか隠さなきや。

「やられたな。」

そんなことを一人悶々と考えていたあたしは、突然後ろから大樹の声が聞こえてびくつと肩を上げた。

「ちよつ、ちよつと！女の子の部屋なんだからノックぐらいしてよ！」

振り返つてみたものの、何だか変に照れてしまつてつまく顔が見れない。

「女の部屋とか言われても、今日は俺の部屋でもあるし。」

「あ…そ、そうだね。」

「まあ、しようがねえよ。いまさらどうしようもねえし。」

テンパつているあたしとは違い、大樹は全く動搖してない様子でそう言い放ち、座り込んでいるあたしのすぐ横にあるベットに腰を下ろした。

「そう…だね。」

観念したあたしはがくつと肩を落とし、ため息を着く。あたしべつかり緊張して馬鹿みたい。…大樹をかぼちゃだと思おう。そうじよう。

「何考えてんの？」

「いやつ、いやー？ 何も？」

思わず声が上擦つて…当然大樹に笑われた。おそらく、あたしが緊張してるのはバレてるだろう。

「やだー。ぼく、そんな変態じやないんですけどー。」

「わかつてゐよ！大樹をそういう目で見てるとか、そういうことじやなくて…。」

そうだ。大樹は天地がひっくり返つてもあたしに手を出さない。そういう男じや無い。じゃあ、何であたしは緊張してんだろう？変な期待でもしてゐるのかな。わかんないや…。

「ちかじや立たない。」

「何が？」

「俺の息子。」

「…あつそ。」

前言撤回。こんな男に変な期待なんかするわけねえー！

『一夜の過ち』なんてあたし達の間には有り得なかつた。もちろんそれ以降も、周りの期待を裏切つて、あたし達の関係は一切変わらなかつたし。あたしにとつて大樹の存在がすごく大きいつてことは、ちゃんと感じてる。でも、それが恋愛感情かと聞かれると…答へは『乙〇』だつた。あたしは大樹に心ちゃんの面影を重ねてるだけだ。香水の匂いも、煙草の匂いも、笑つたときに見える八重歯も…全部全部心ちゃんを思い出させる。大樹の傍にいたいと思つ気持ちは、ただ単に心ちゃんを忘れられないあたしのエゴだと思つ。心ちゃんの代わりでいいから傍にいて…そんな勝手なこと考へてる自分が嫌い。

そして今日は11月5日。本当なら4回目の記念日を、楽しく心ちゃんと過ごしてたはずにな…。あたしは一人でいつも場所に来ていた。わざわざタクシーまで使って、こんなところで何をするつもりなんだる。いくら待つたって心ちゃんは来ないのに。さすがに夜は冷え込んで、あたしは薄着できたことを後悔していた。冷たくなってきた手を、ぎゅっと握りしめ、あたしはゆっくり目を閉じた。頭の中にはあの頃と変わらない心ちゃんがいる。一緒に夜景を見ながら、ちつとも口マンチックじゃない言葉で愛を確かめ合つて。お互い照れ屋だったから、真面目な空気が苦手で、あまり言葉にはしなかつたかもしれない。でも、繋いだ手とか重ねた唇とか、そういうものだけでも十分気持ちは伝わつた。心ちゃんのおつきなパークーの中に、あたしも無理矢理入つて…凄く凄く暖かくて…本当に幸せだつたのに。

長い夢だつたらいい。心ちゃんがいない世界なんか、夢だつたらいいんだ。あたしは心ちゃんがいないと息の吸い方もわからなくなる。苦しくて苦しくて。こんな世界もう嫌だ。いくら哀しさに馴れたつて、きっと消えることはない痛みがあたしを苦しめる。心ちゃんじ

やなきや嫌だよ。知ってるでしょ？あたしわがままなんだ。

「会いたいよ…。」

とめどなく涙が流れた。誰かに見られたら恥ずかしいとか、そんな気持ちも押し潰してしまつほど、ただ悲しくて寂しくて。満たされない。全然満たされないよ。

今まで貯まっていた分沢山泣いて、あたしはまたタクシーで家に帰つた。あつという間に11月5日は終わつた。

第30話・来年になつたら（前書き）

更新だいぶ遅れて申し訳ないです　実はこの話と同じ状況になつてしまい…しばらく何も出来ませんでしたm(ーー)m自分の書いてる話は元々考えていた結末にするつもりです！…あたしの恋愛とは違う形ですね…とりあえず、少しずつ回復してきてるのでまた書いて行きたいと思います　応援よろしくお願ひしますo(^_^)o

第30話・来年になつたら

愛してゐる人が生きてていればそれで幸せ。愛してゐる人が幸せならあたしも幸せ。そんな綺麗ごとをずっと心の中で思つていた。本当はそんなことちつとも思えてないことくらい、だいぶ前から気付いているけど。

あつといつ間に終わつた4回目は、ただあたしに空しさを感じさせた。考へても意味がないのに『どうして駄目になつたんだろ』とか思つちゃつて。やっぱりあたしは心ちゃんの隣りがいいつて再確認した。

最近はあまり泣かないでいたのに、また泣き虫になつちやつた。あたしはバックから煙草を取り出して火をつけた。心ちゃんの匂いがあたしの身体を包み込む。

「ちか？…煙草吸つてんの？」

休憩室に入つてくるなり、初めて見るあたしの姿に大樹は驚いた。

「吸つてないよ。煙出してるだけ。」

「は？」

そりやあ理解してもらえないよなあとあたしは笑つた。煙出して遊んでるなんて、ただの馬鹿だ。

「あ、大樹煙草吸うでしょ？勿体ないからこれ吸つてよ。ちょっと口つけちゃつたけど。」

「いつつも煙出して遊んでんの？」

「そ。」

「ふうん。」

大樹はあたしの指から煙草を取つて、ゆっくりと吸い始めた。なんだか、煙草の吸い方まで似てる気がする。こんなにそつくりなのになんであたしは心ちゃんじやなきや愛せないんだろう。大樹を好きになつてもうまくいくとは限らないけど。

「そりいえば、新しいバイト入るんでしょう？」

「ああ、香の友達らしいよ。一気に2人取るんだって。まあ、今人足りないし、これから忙しくなるし。」

「そつか。…落着いたら免許とろつかなあ。来年あたりにでも。」
ふつと思ひ立つたことだつた。やつぱり車がないのは辛いし、何かと不便だ。この年で自転車に乗るのもなんとなく恥ずかしいし。
「それはお勧めするね。またアッサーにされたんじやたまんねえし。」

「ぶつさいくな顔で煙草を吸いながら大樹はそう言つた。確かに大樹には沢山迷惑をかけた氣がするから…そこは言い返せない。バイト帰りだつてほとんど送つて貰つてるし。

「頑張つて免許とります。」

「頼みますよ。」

「はーい。」

少しずつだけど貯金はしてたし、なんとかなるでしょ。来年から時間の余裕も出来るだらうし、なるべく早めに取っちゃいたいな。なんだかやりたいことが見つかつたら、少し楽になつたかもしけない。毎日を過ごしていく目標みたいなのが必要なんだなあ。
来年までいっぱい稼がないと！

第31話・必要な人（前書き）

ひとつもなくサボつてしましました。読んでくださっていた皆様ホントに「めんなさい……いろんなコトがありました……」（^_^;）恋愛つてほんとにすごいですね。力をくれたり奪つたり……あたしはまだまだ子どもなんだと思い知られました。こんな未熟なあたしだすが、これからもよろしくお願ひいたします（^-^）

第3-1話・必要な人

春から自動車学校に通い始め、やつくりマイペースに免許をとり、
バイトを掛け持ちしてお金を貯め…ようやく自分の車を買ったのは
もう枯れ葉が散り始めた秋だった。

やることもじつぱいで、この1年近くはあつとじつ間に過ぎた気が
する。

…今でも心ひやんのことは時々夢に見る。でも、昔みたいに逢いた
くなったり、声が聞きたくなったりする口は極端に減った。毎日忙
しかつたおかげかな。正直まだ好きだけど、昔を思い出して泣くこ
ともない。相変わらず部屋の匂いは変わらないけど、写真もプリク
ラも見たりしない。少しずつ少しずつ時間に癒されてるんだと思う。
「お待たせしました。」

「…ん。」

あたしがそう言つて助手席に乗ると、大樹は体を起こしてハンドル
を握った。

今日は大樹に送つてもうつ最後の日かな。明日は納車の日だから。
思い返してみると、本当に大樹にはお世話になつた。いつもあたし
の傍にいてくれたし、仕事の送り迎えだって必ずしてくれた。…感
謝しきれないよ。

「明日からは自分の車で出勤するから安心してね!今まで色々面倒
だつたでしょ。」

「別に。俺が好きでやつてたことだし。」

「…そ、そつか。」

最近の大樹は変に優しくて、なんだかこっちが調子狂つちゃうよ。
妙な間があいたので、あたしは何か話題を探した。

「そういえば…」

「あのセー、突然で悪いんだけど俺と付き合つて。」

「…へ?…」

…思考回路が停止した。本当に突然過ぎるよ…って、それより本氣で言つてんの？！ホント最近の大樹は何考へてるのかさつぱりわかんない。

「困るのはわかるんだけど、黙られるしさすがに俺も恥ずかしいんだけど。」

「あ、はい、そう、ですよ…ね。」

「そうですよね…」

大樹はいつもどおり八重歯を見せて笑つてゐる。からかつてゐるのかなきつとそだよ。大樹には好きな人がいるわけだし。

「言つておくけど冗談じゃねえからな。本当はこんな早いタイミングで言つつもりはなかつたんだけど。」

「えつ、いや、でも、大樹好きな人いるつて…」

「アホか！それがちかなんだろ。わかれよ…。」

大樹はいつもと全然変わらない口調でそう言つたけど、チラリと盗み見た横顔は少し照れくさそうだった。あたしも思わずカアーッと頬が熱くなるのを感じた。そりや、好きだなんて言われて嫌な気はしないけど…でも、今のあたしにはなんて答えるべきのか全然わからない。断れば大樹との居心地のいい関係は終わっちゃうだらうし、だからつてまだ心ちゃんのこと忘れてないのに付き合つなんて…。

「ちかがさ、元カレを引きずつてんのは分かる。」

「えつ！？なんで…」

あたしそんなこと一言も…。香にも千秋ちゃんにも言つてないのに…

「どこに出かけてもキヨロキヨロして、誰か探してゐみたいだつたし。俺じゃない誰か見てるのはわかつてたから。」

…やっぱり大樹はエスパーだ。あたしのことなんでもお見通しなんだね。

「だからまだ言わないほつがいいかなつては思つてたんだけど。俺の送り迎えの役目終つちゃうと、あんまり話す暇もなくなるしさ。今日のうちに言つとこーと思つて。」

「でもつ…やつぱ何か信じらんないよ。全然そんな素振りなかつたし…」

「みんな俺の気持ちには気付いてたと思つよ。ちかぐらいだつて。わかつてなかつたの。」

あ、そつか…。だからみんないつもあたし達をくつつけようとしてたんだ…。あたしホント馬鹿だ。なんでずっと気付かなかつたんだろ。それに…自分辛いからつて大樹の気持ち利用して、いつも甘えて…最低だ。今だつて…これが嘘だつたらいいのについて思つてる。だつて…あたしはまだ心ちゃんのことを忘れられてないから、大樹と付き合うなんてやつぱり出来ないし。でも、だからつて大樹を失うのも怖いんだ。結局あたしつてずるい人間。

「俺はずつと我慢してたよ。んで、ちかも頑張つた。だからもう、甘えたらしいじやん。」

「でも、あたしまだ…」

「今はまだ好きでもいいよ。とりあえず俺はちかと一緒にいたいし、気持ち隠してんの面倒になつたから言つただけ。あ、別にちかのためとかじやねえよ？俺がちかの弱味に付け込んでんの。」

弱味に付け込んでるのはあたしの方なのに…大樹は優しいね。

「心配しなくても突然襲つたりしねえよ。」

からかう様にそう言つて、大樹はあたしの頭をくしゃくしゃにした。甘えていいのかな。大樹の優しさを利用して、あたし最低な人間になつちやうんじやないかな。でも、大樹の傍にいると気持ちが落ち着く。心ちゃんの隣りにいた時みたいに温かい気持ちになれる。まだ今は心ちゃんを越えることはないかも知れないけど、大樹ならきっといつか好きになれる気がする。

ねえ、心ちゃん。あたし前に進んでもいいかな。傍にいてくれるこの人に賭けてみてもいいかな。気がつけばあれから2年近く経つたんだね。もう、いいよね…。

「大樹…ありがと。」

「ちか、煙草取つて。」

「ん。」

あたしは大樹のロッカーから煙草を取り、手渡す。そんなありきたりの光景をマジマジと見つめる香達…。

「…お前ら見過ぎ。」

「だつてえ〜。」

香達はニヤニヤと笑い、『ねえ〜』と声を揃えて言った。

「ずっと応援してたかいがあつたよ。」

小鷹君の一言にみんなが頷く。あたしは恥ずかしくなつて下を向いた。

「これで今度から6人で遊ぶ時は氣い使わないで済むね。」

そんな香の一言に

「お前ら氣い使ってたの?」

と、大樹は大袈裟に驚いて言った。

確かにみんな好き勝手やつてなあ…と改めてあたしも笑つた。お泊まりの時だつて大樹と2人きりにされたし、氣い使ってたなんて到底思えない。

「これからはお泊まりも有りだね。」

千秋ちゃんがサラツと言つた言葉にあたしは固まつた。大樹と付き合つて決めたものの、まだそういう『行為』は考えたくなかつたから。手を繋ぐのですら何か違和感があつて、照れくさくて…ああ、これから先が思いやられる。

「あのキャンプの時は大樹地獄だつたろ?からね。可哀相でしじうがなかつた。」

『可哀相』なんて言いながらも小鷹君達は笑つた。きっとその日もみんなコツソリ笑つてたんだろう。

キャンプの日、大樹はあたしよりも普通で…全然そんな素振り見せ

なかつたのに。…平氣なふりをしていたんだろうが。だとしたら、かなりのポーカーフェイスだ。

「…まあ、しばらく地獄は続きそうだけじ。」

溜め息混じりに言つた大樹の言葉に、みんなはいつせいに笑うのをやめ、そして憐れんだ田で大樹を見た。

「変な目で見んなよ。」

「もしかしてキスもまだなの?…」

「……。」

顔を赤くして黙り込むあたしの横で大樹は

「俺意外とシャイだから。」

なんてかつこつけた。本当はこの前されそうになつたんだけど…。お察しのとおり、あたしはそんな大樹を受け入れることが出来なかつた。もう付き合つてから1ヶ月以上経つのに…。自分が情けない。子どもじやないんだし、キスくらこちやんとしなきや。

第33話・ひめとくわいわ（前書き）

毎回毎回更新がとんでもなく遅れてしまい、申し訳ないです。 読んでくださってる方に感謝します(、・。) 気長に読んでいただけないと嬉しいです！ 今はだいぶ元気なので、なるべく早く更新してこの話を完結させたいと思ってます
いします(ーー)m
よろしくお願ひ

第33話・ちやんと向かひつけ

「…そんなにかまえられるとする気が起きない。」

大樹は溜め息混じりにそう言って、あたしの肩から両手を離した。

「…ごめんね？な、なんかまだ、恥ずかしくって…」

「いーよ。待つて言つたの俺だし。」

そんなセリフとは裏腹に、大樹はとても機嫌の悪そうな顔をしている。そりゃあ、キスもエッチもなしで半年も付き合つてれば…誰だつてこいつなるよね。

さつきは恥ずかしいなんて言つたけど、実際はそうじやない。確かに照れくさいってのも、2割くらいはあるかもしれないけど。本当は、田をつむると、心ちゃんが浮かんで来ちゃうから。だつて、キスするとき他の男を想像しながらなんて…そんなの失礼だもん。いつそのこと、考える隙を『えないうつなタイミングでキスしてくれたらいいのに。大樹は優しいから、強引になんてしたくないんだろうけど。

「ちか。今度さ、旅行いかね？」

「あー、うん。どこいくの？みんなに言つた？」

この場合の、みんな、つてのは、いつもの仲良し6人メンバー。しそつちゅう6人で遊んでるから。

「いや、俺が言つてんのは、2人で。」

「えつ…そ、そっちかあ！」

変な空氣を和ませようと、無理に笑つたのがいけなかつた…。余計変な空氣になつちやつたよ。

「…やめとく？」

やめときたい、できれば。でも、ここでやめたら、きっとあたし達は先に進めないまま。いつも機会を無理にでも作らなきゃ、ダメなんだと思つ。こつまでも大樹に甘えてちゃダメだ。…腹くくんないと。

「…やめとかない。」

「…ん？」

「やめとかないよ。行こう？旅行。」

たぶん、あたしの返事が意外だつたんだと思つ。大樹は目をおつきくして、あたしを見てる。

「…本気？」

「…うん。マジ。」

あたしは「ぐりと睡を飲む。

「じゃあ、今度パンフレット見に行くか。」

あ、また、ポーカーフェース。でも、今日は少し隠し切れてない。

耳がほんのり赤いよ。

大樹：あたし、ちゃんと向かい合うからね。

第3・4話・夢の国だから

ついに、この日がやって来た。そう、大樹と2人での旅行だ。何かと理由をこじつけて、先延ばしにしてきたけど…そんなのいつまで通用するわけなくて。旅行の話が出てから3カ月。半ば強引に今日という日を迎えたわけで。

行き先はまあ、定番の夢の国。ディズニーランド。1泊2日の予定だけど…あたしがびびって逃げる可能性3割。遊び疲れて寝る可能性3割。はしゃいで誤魔化す可能性3割。大樹にうまく丸め込まれる可能性…1割。

別に大樹が生理的に受け付けないとか、そういうことじゃあ、全然ないんだけど。むしろ、見れば見るほどタイプだし。

でも、その一線を越えるのは、もう少し後がいいくのが本音。まだあたしん中に心ちゃんがいる。時々、大樹と心ちゃんを重ねてる自分がいる。まだ、大樹を好きになりきれてない氣がするの。気に食わないところなんて何一つないのにな。なんで、心ちゃんに勝てないんだろう。もつすぐ別れてから3年。いい加減、新しい恋愛に夢中になりたいよ。

「ちか、着いたよ。」

ディズニーランドに向かう車の中、寝ているふりをしていたあたしを、大樹は優しい声で起した。あたしは眠たそうな声で

「うん。」

とだけ答えた。狸寝入りばれてないといいけど。

こんなときには寝入りするなんて、嫌な彼女だよね。でも、意識しそぎて耐えられなかつたんだもん、しようがないよ。途中で『帰る』とか言い出さなかつただけ、まだマシ。

「眠い?」

「ううん、大丈夫!」

あたしは大きく首を横に振った。

「さ、早く行こつ！」

大樹が心配そうな顔で見てるので、あたしは明るくそう言って車を出た。もしかしたら『帰りたい』って顔に出てたのかも。こんなにあたしを大事にしてくれる人を、あたしは傷付け過ぎてる。もっと思いやりの気持ち、大切にしなきゃダメだよね。

あたしは思い切って、自分から大樹の手を握り、入口へと走り出した。

第35話・溢れ出しかかったの

“じりじりめいひ……じりじりめいひ……じりじりめいひ――

あたしはバスローブ一枚でダブルベッドに腰掛け、ドアの向こう側から聞こえるシャワーの音を、ただずっと聞いていた。

…正に据膳。

大樹、シャワー浴びながら何を考えてるんだらう。あたしは…じりにかこの場を回避する方法ばっかり、せつきからずつと考へてる気がする。今、寝たふりしちゃおつかな。でも、大樹のことだから見破るだれう。具合悪いふりしようかな…却下。明日楽しめなくなつちやう。ああ…じりよひ。

シャワーの音が止まり、一段と緊張が増したじりで、あたしのおマヌケな携帯着信音が鳴った。無駄に慌てながらあたしは立ち上がり、テーブルに置いてある携帯を手に取る。

「えつ…」

携帯を開くと、そこには懐かしい名前が点滅していた。心ちゃん。

ただでさえパニクつてる状況なのに、なおさら思考回路じりゅうじや。なんで?じりしてこのタイミングで電話なんかかけてくるの?もう、大樹だつて上がつときちゃうし…。

あたしは何度も携帯をテーブルに置いたり、手にとつたりを繰り返した。正直、早くコールが鳴りやめばいいと思つた。そしたら何もなかつたように忘れられる、きっと。でも、全然止まる気配はない。痺れをきらしたあたしは、勇気を振り絞つて通話ボタンを押した。

「…はー。」

思わず声が震える。

「あ、ちかちやん?」

「…え?」

電話の向こうから聞こえて来た声は妙にお気楽で、あたしは一瞬言

葉に詰まつた。そんなことより、多分、この声…心ちゃんじゃない。

「あー、わかんないか。俺、俺一心の友達のゆーたつ。」

『ゆうた』っていう名前を聞いて、よつやく声の主と顔が一致した。

そういうえば、あたしも仲良くしてたっけ。

「あつ…お久し振りです。えつと…なんで?」

「あー、実はや、」

ゆうたさんが何かを話し始めようとしたらとき、

「もしもしし?『ごめん!』

急に聞き慣れた愛しい声に変わった。心ちゃんだ…。

「えつ?」

「今ゆうたと飲んでたんだけど、あいつ酔つてるから、俺がトイレ行つてゐる間に勝手に電話かけちゃつたみたいで…。ほんと、『ごめんな。』

「…『うん、なんとなくそんな気したし。いたずらされたんじゃ、しうがないよ。大丈夫、気にしてないから…。』

あたしは少し意地を張つてそう言つた。3年近くも引きずつてゐるなんて、そんな重い女だつて思われたくなかったから。

「そつか。じゃあ、またな。…あ、またつていうのは違つか…」

心ちゃんが困つたように笑つてる姿が目に浮かんだ。また、なんて、もうあたしたちの間には必要ない言葉なんだね。

「…うん。飲み過ぎないようにね。」

「…ん。気をつける。」

「じゃあ…切るね。」

「…うん。」

あたしは心ちゃんの返事を聞いてすぐ、電源を切つた。昔は心ちゃんが電話切つたのを確認してから、切つてたんだけど…。早く切つてしまわないと、余計なことまで言つちゃいそうで怖かつたから。逢いたい、まだ好きだよつて…心ちゃんの声を聞いたら、溢れ出しそうになつたの。だつて、あたし…期待した。もしかしたら、心ちゃんが『やり直したい』つて、そう言つてくれるかもつて、期待し

たの。

馬鹿みたい。こんなタイミングで、自分の本当の気持ちに気が付くな
んて。

あたしきつと、この状況でも、心ちゃんに『やり直したい』って言
われたら、大樹を置いてでも、今すぐに帰った。まだ、全然ダメだ
よ。

声聞いただけなのに、笑顔を思い出しただけなのに、こんなに、好
き、が込み上げて来る。今までずっと押し込めてきた気持ちが、溢
れ出しちゃったの。今、あたしの頭ん中は心ちゃんでいっぱいだよ。
『またっていうのは違うか』って言葉が、ずっとチクチクして…苦
しい。悲しい。

忘れてた…。好きな人を思うと、こんなに切なくて涙が溢れること。

「…ちか。」

「…。」

大樹：ごめんね。

第36話・「めんな

「今、元カレ?」

大樹があたしのそばにきて、静かにそう言った。怒つてるような、でも泣き出しそうな、そんな声に聞こえた。

「大樹、あたし、やつぱり…」

「別に諦めきれてなくたっていいって言つたじゃん。気にすんなよ。あたしの言葉を遮るように、少し冷たい声で大樹は言った。これからあたしが何を言おうとしてるのか、たぶん大樹にはわかつてゐるだろう。

「でも、付き合つてたって何も変わらないし、意味あるのかな…」

「あるよ。堂々とヤキモチだつて妬けるし、俺の彼女だから触んなつて言つたつて変じやない。そんなんで、今は十分なんだよ。」

胸が苦しくなつた。大樹の言葉一つ一つに、あたしを大切に思う気持ちが感じられたから。そして、それに応えられない自分が、情けなくて酷い女に思えた。
少しだけ、大樹が自分自身と重なつた。どんなに好きで、もがいても…叶うことのない想い。それでも、諦めきれずにいる。それぞれに一方通行で、交じり合つることもない。きっとあたしたちは平行線のままだ。

「大樹、もう…別れよ?」

「だから、焦んなつて。…ヨリ戻そうとか言われたの?」

「そういうわけじゃないけど…あたし、大樹に散々期待させて、甘えまくつて、それなのに裏切るかもしれないんだよ。」

いつだつてほんとは心ちゃんが上回つてた。そばにいてくれる大樹を1番だと、どうしても言えなかつた。

「裏切るつて、元カレに戻るつてこと?」

「…。」

「ありえないよ。別れたの何年前だと思つてんの？『アリ庚すつもり
だつたら、とつくなつちから連絡よこして』る。ちゃんと、現実見
ろよ。」

最後の言葉は震えてよく聞き取れなかつた。大樹があたしを傷付け
ることを、平氣で言えるはずがない。いつだつてあたしを一番に想
つてくれた。

その大樹がこんなセリフを言つなんて…そんなにまであたしは、大
樹を追い詰めていたんだ。

「…『ごめんね。大樹を好きになれなくて、ごめんね。』

「…ほんとに無理なの？可能性は1%もない？」

大樹は俯いて、とても不安そうに小さな声で尋ねた。あたしは『う
ん』とだけ答えた。涙が次々に溢れて何も言えなかつたから。沢山
ごめんねって、ありがとうって言いたい。

心ちゃんに出会わなかつたら、きっと大樹があたしの1番だつた。
でも、これがあたしの…あたしたちの運命だ。

第37話・変わりたい

大樹を好きになろうと思った。なれるとthought。一緒にいて楽しくて、安らげ……あたしの求めているものを大樹は沢山持つてたから。何年後かには今日の判断を後悔するかもしれない。逃した魚はでかかつたつて思うかもしれない。でも、今のあたしには大樹の気持ちに応えられない。同じ量の愛情を返してあげれない。

結局、ホテルで一泊して、次の日は遊ばずに帰ってきた。車の中はもちろんすごく空気が重たくて、とても息苦しかった。大樹とのお気楽な関係は、もう戻つてこないんだと痛感した。

車を降りようとしたらあたしに、大樹は『もう一度だけ』と同じ質問を投げ掛けた。

『俺に可能性はない?』

答えは同じ。あたしは頷いた。大樹はあたしに笑顔を向けることもなく『わかった』と言つた。

ドアを閉めるとすぐに車は発進して、あたしはその走り去る車を目に焼き付けた。きっとあの車に乗るのはこれが最後だから。

大樹ともつとちゃんと話さなきやいけないとthought。でも、言葉にすると涙が溢れてうまく喋れないし、あたしが泣くのはなんか違うと思つた。このままいいとは思わないけれど、今はこれ以上なにも出来ない。

環境が変われば……時間が経てば、あたしも変わると思つてた。でも、実際は全然変わつてない。心ちゃんに対する想いも、自分の精神的な面も。いつまでもあの家に縛られて、馬鹿みたいに煙草の煙を充満させて……。こんな感じダメだ。全然ダメ。いつまでたつても心ちゃんが消えるわけない。大樹にすがりついて、思い出に縛られて、ずっと前に進んでないんだ。

甘つたれなあたしはもう終わりにしたい。

変わりたい、
強く。

第38話・元気ではない

「辞める?...」

「はい。」

突然の申し出に驚いた店長に、あたしは苦笑いをしながら頭を下げた。

ここにはもう、いられない。本当はずっとみんなと一緒にいたけど、これ以上大樹に迷惑かけたくなかつたし、正直どう接したらいいのかわからなかつたから。

「実家に戻る予定なんです。出来れば夜は家についてあげたいし……」
あながち嘘ではなかつた。本当にもうあの家にはサヨナラしないといけない。とりあえず実家に帰つて、新しい環境で自分を変えたい。

「わかつた。じゃあ、今週末で終わりにしよう。んー、みんなで送別会やらなきやな。」

「いえつ、そんな、悪いです……」

「そんくらいいいだろー。最後はパーッとね！」

店長は笑つてあたしの肩に両手を乗せた。もちろん善意で送別会を企画してくれるんだ。…断れるわけがない。

「あ、ありがとうございます。」

「じゃあ、今日も張り切つて仕事してね！」

「はい！」

あたしは元気よく返事をし、笑顔を見せた。大樹と気まずいからつて、やる気がない態度をとっちゃダメだもんね。この店にはほんとに感謝してる。だから、最後は迷惑かけずに終わらせたい。ありがとうつて気持ちをちゃんと残して去りたいんだ。

でも、あと一週間。大樹とどうやって接したらいいんだろう。どんな態度が大樹にとってベストなんだろ。もうこれ以上大樹を傷つけたくない。あたしが辞めるって知つたら、どう思うかな…。みんな

にもちやんと話さなきゃ。色々考えて、こうするのがベストだと思つたつて。納得してくれるかわからぬけど、この考えはもう変わらない。みんなにはひたすら謝るしかないかな…。

来月はもう11月。心ちゃんとサヨナラした季節。あれからもう3年経つたんだ…。こんなに引きずることってあるんだなあ。

それくらい愛せる人に出会つたってこと。これだけでも、あたしの人生最高だったって思うの。だから、もう一度誰かを死ぬほど愛したい。誰かと比べたりしないで、ただ一人だけを見つめていたい。まずは心ちゃんを忘れよう。思い出の品も全部封印。家も出る。1月5日、記念日にあの場所に行こう。それがあたしの気持ちの最後にする。新しいあたしになる。

第39話・送別会

「ちかちやん絶対遊びに来てよー!?」

香は涙を浮かべながらあたしに抱き付いた。しんみりした別れが嫌だからって、せっかく送別会を企画してもらつたのに…あたしも悲しくて泣けてきちゃつた。

「メールとかめっちゃするからねー!..?」

「うん。あたしもする。」

「…。」

千秋ちゃんは、あたしの勝手な決断に少しすねているようで、何も言わず香の後ろでこつそり泣いていた。

別にもう一生会えないってわけでもないのに、

なんでこんなに悲しいんだる。

「まあ、まあ。女性陣、そんなに泣くと綺麗な顔が台無しになるよー。」

小鷹君がそう言つてあたし達を慰め、匠は酔つた勢いで香と一緒になつてくつついてきた。

「ちょっとー匠、ウザーい。」

香が匠を押し退けてそう言つと、ようやくみんなに笑顔が戻つた。

そんな中、大樹は何も言わずにあたし達を見ているだけ…。前までの関係だつたら、真つ先に大樹があたしの泣き顔を笑つたのに。

この1週間、大樹とは仕事以外の話はしていない。

多少氣まずい空気はあつたけど、仕事中はいつも通り優しくあたしに接してくれた。でも、仕事が終わると『お疲れ様』だけまるで決まり事のように言い合い、あたしはそのまま一人で帰るようになつていた。そんなあたし達の異変にみんなが気付かないわけはないけれど、あえて誰もそのことには触れなかつた。最後までみんなに気を使わせてしまつて、申し訳なかつたな…。

「…あげる。」

香の後ろで泣いていた千秋ちゃんは、まだ少し怒った様子でヒヨコのストラップをあたしに渡した。

「…可愛いーー！ありがとう。」

「それ、ちかちやんに似てるから買つたの。香とあたしとお揃いだよ。」

千秋ちゃんがそう言つと、香が

「えへへー。」

と言いながら、携帯につけてあるヒヨコのストラップを揺らして見せた。

「えつ…超嬉しいんだけど…。」

「なくさないでよ！』

あたしはストラップを両手で握り締め、うんづんと首を振つた。

「あれ？俺らのは…？」

「…ない。」

「ひつでー！」

匠が泣きまねをして小鷹君に抱き付き、そんな匠を小鷹君が突き放しそうまるでコントのような光景を見て、またあたしたちは笑つた。

「じゃあ、そろそろ…。」

少し遠慮しがちに小鷹君がそう言つと、あたしたちは諦めたように頷き、少し涙を滲ませた。…しようがないよね。別れはいつかくるもんだから。

「…じゃ、ちかは俺が送つてくから。」

「えつ？」

さつきまで蚊帳の外にいた大樹が突然そう言つて、あたしの腕を取つた。

「ちよつ、大樹…」

「じゃあ、お疲れ様〜！

大樹はあたしの言葉を遮つてそう言い、みんなに手を振つた。

「お疲れーー！ちかちやんまたねー！」

みんなもこうなるのが当たり前つて感じで、違和感なく手を振り返

している。

「あつ、えつ、いや…」

「行くぞ。」

「…はい。」

有無を言わせない大樹の高圧的な声に、あたしは素直に従うことにしてた。

「またねー！」

みんなに手を振り、先に歩き出していた大樹の近くまで、小走りで駆け寄る。

これがいい機会だ。大樹とちゃんと話そう。
もう逃げないで。

第40話・帰り道で

いつたい何から話せばいいのか、何を伝えるべきなのか、あたしにはよくわからなかつた。でも、大樹にはあたしの気持ちを全部伝えなきやいけない、そんな気がした。

「…辞めたのつて俺のせい？」

少し申し訳なさそうな声で大樹はあたしに聞いた。あたしはなんて答えればいいのかわからず、ただ下を向いて歩いていた。大樹のそばにいられないって思ったのは、バイトを辞めるきっかけだつたけど…それはあたしの心の弱さが原因。むしろ自分のせいだ。

「…あたし、このまま大樹のそばにはいられない。」

「でも俺は、やっぱりちかが好き。代わりでもいいからそばにいたいと思う。」

今大樹がどんな顔でそのセリフを言ったのか、それを確認する勇気はあたしにはなかつた。『覚悟を決めた』って目で見られたら、それを断ることはあたしに出来ないと思ったから。

「大樹は…利用するにはいい人すぎる。」

「いい人なんかじゃねえつて。弱みに付け込んでんだから。」

「そんなことないよ。大樹はあたしにとつて大切な人。大切な人を傷付けるような人間になりたくないって思う。」

しんみりした空氣の中、あたしたちは何も言わず、帰り道の途中にある公園に立ち寄つた。あたしの家に着くまでの10分で、話のケリがつくとは思わなかつたから。

「大樹のこと、好きになれると思つた。」

あたしは公園のベンチにゅつくり腰掛けた。大樹はあたしの斜め前に立つたまま…。あたしは泣きそうな顔を見られたくないくて、少し下を向いて話した。

「ほんとに大樹は完璧なんだよ。あたしの理想そのものっていうか

…。」

「でも、元彼には勝てないんだ？」

「…うん。ディズニー・ランドに行つた日、あたし大樹のものになるつて、覚悟してたつもりだつたんだけど…。」

あの時心ちゃんから電話が来なかつたら、あたしたちは普通の恋人のように幸せに過ごしていただろうか。…いや、きっといつか自分の気持ちが誤魔化せなくなる日が来てたはず。ほんとの気持ちに気付いてたはずだ。

「…うん。ちかの覚悟はちゃんと伝わつてたよ。」

大樹は優しくそう言つと、あたしの隣りに腰掛けた。

「電話がきて、あたし期待したの。…より戻そつて言つてくれるんじやないかつて。」

「うん。」

「… そう言われてたら、あたしは大樹を裏切つて、すぐにでも元彼のところに帰つた。何年も一緒にいて、あたしを大切にしてくれた大樹を裏切つて、自分だけ幸せにならうとしたんだよ…。そんな自分がいるつてわかつたとき、自分のことほんとに最低だつて思つた。」 最低で… そんなずる賢い自分には大樹の気持ちは真直ぐ過ぎた。綺麗で眩しくて、あたしはそれと同じものを返せなかつた。

「元彼とは3年付き合つてたんだけど、あたしにとつてはものすごくおつきな時間で…。何度も忘れようとしたのに、どこに行つても何をしても思い出しちやう…全然消えない。」

「…。」

大樹はあたしの話を静かに聞いていた。所々に小さく相槌を打ちながら。大樹の顔を見る勇気がなくて、あたしはただずつと地面を蹴る自分の足を眺めてた。声のトーンとか空氣で感じるのは、大樹が怒つてるわけじゃないってこと。あたしの気持ちを全部すくい取つてくれてるような、そんな気がした。

「元彼にはつきりフられたつて気もしないんだ。…だからたぶん、いつか戻つて来るんじやないかつて思つちゃうんだよね。大樹の言

つた通り、3年もほつとかれてるんだからありえない話なんだけどさ。」

あたしが少し無理して笑うと、それに気付いた大樹があたしの頭を撫でた。どうしてこの人はこんなに優しいんだろう。自分で言うのもおかしいけど、あたしにこんな話されたら大樹だって辛いはずだよね…。なんで大樹を好きになれないんだろうな…。ほんと恋愛つて理屈じゃない。

「で、元彼が戻って来るまでずっと待ってるつもり?」

「…うん。来月の5日ね、記念日なんだ。いつも…記念日に行つてた思いでの場所があるのね。そこに行つて、自分の気持ちにケリつけるつもり。思い出の品たちも、全部捨てる。…とりあえず、そこから。あとはまだ何も決めてない。」

ようやく大樹の方を向いて、あたしは笑つてみせた。話したいことは全部話せたと思う。なんか…スッキリした。

「大樹、ごめ…」

「ごめんね、と謝ろうとした時、突然大樹はあたしをきつく抱き締めた。

「気持ちにケリつけたら、俺んとこくればいいじゃん。」

「や、でも、それは…あの…」

「他の誰かを好きになるより、俺を好きになる方が簡単だと思わない?」

「それは…そう、なんだけど…」

大樹はあたしを抱き締める力をゆるめ、深く息を吐いた。

「…それが一番だと思う。待たせて。」

「でも…あたし、その日までに元彼に何か言われたら、平氣で大樹を裏切るよ?！」

「それでもいいよ。ちかが元彼に戻つたら、そんときは潔く諦める。つーか、たぶんそんくらいのダメージないと諦めらんない。…ちかもそういうことでしょ?」

体を離し、大樹はあたしの顔を覗き込んだ。あたしは返答に迷い、

口をパクパクさせ、目をそらした。

大樹の気持ちが正直嬉しくて、その反面苦しかった。その想いに応えられなかつた時、大樹をどれだけ傷つけるんだろう。あたしと同じくらい泣いて、同じくらい引きずるんだろうか。

「嫌つて言つるのは無しね。どつちにじろ諦めがつかない気持ちは、ちかが一番わかるでしょ。」

「…傷ついてもいいの？」

「ちかは傷つくのが嫌だから諦めるつて、そんな風に出来なかつたでしょ？」

確かに…。大樹の言葉はいつも確信をついてるんだ。あたしがうまく言いくるめられる相手じゃない。

「ん…ありがと。」

第41話・時間よ止まれ

11月5日、ついにこの口が来た。仕事もなく暇を持て余していたあたしは、この2週間、部屋の大掃除をしたり、買い物に出かけたりと、普段出来なかつたことを沢山した。半分、現実逃避だつたのかもしれない。でも、今日はちゃんとケリをつけなきゃ。

あれから大樹とはメールのやりとりだけしていた。前と変わらずくだらない話ばっかり。それが大樹の最上級の優しさだと感じた。

そんな大樹は

『今日はどうしても一緒に行きたい』

と、いくら断つてもきかなかつた。近くまで送り、車の中で待つてるから…と。なんだか、さらに追い込まれた感じ。きつとそこまでしないと、あたしがちゃんと答えを出さないと思つたんだろう。…あなたがちハズレでもないような気はするけど。

「…じゃあ、行つて来るね。」

「うん。」

「ほんとに何時間も待たせると思つよ？朝になるかもよ？」

あたしは車のドアを半分開けたまま、大樹にそう言った。

「はいはい、わかつたから。早く行つてきな。」

大樹が少し笑つてあたしにドコポンを食らわせた。あたしは観念して車から出て、中で待つ大樹に手を振つた。

駐車場から少し歩いたところに、綺麗に夜景が見えるベンチがある。あたしはそこに座り、ゆっくりと息を吸つた。この夜景は何度見ても綺麗だなあ、と思う。そして何度見ても心ちゃんを思い出す。ここでいろんな話したなあ…。今でも全部覚えてる。

出会つたときは、こんなに心ちゃんを好きになるなんて考えもしなかつた。何年も一緒にいて、どんどんどんどん気持ちが膨らんで…それは心ちゃんも同じだと思つたのにな。ほんとに心ちゃんが全てだつたんだつて、離れてみて実感した。どこに行つても苦しくつ

て、一人になれば涙が出て…逢いたくて逢いたくてしょうがなかつた。

心ちゃんと沢山喧嘩したはずなのに、別れて思い出すのは楽しかつた事とか嬉しかった事ばっか。だからなおさら、気持ちが募つてくる。あの頃より今のほうが、もっと愛しいと思つのは、やつぱり変なことなのかな…。どう頑張つても心ちゃんは消えないよ。

痛い。苦しい。悲しい。どうしてこんな感情を、人は恋だつて言つのかな。恋愛は楽しいだけじゃないつて…じゃあ、苦しいだけのこの想いも、恋愛と呼ぶんですか？誰か教えてよ。

あたしは声もあげずに静かに泣いた。涙で滲む夜景も案外綺麗に見えた。

ねえ、心ちゃん。あたしは今でも心ちゃんが好きだよ。でも、もう3年が経つちやつたね。そろそろ潮時かなつて思つてる。眞付くのが遅すぎるくらいだよね。

あと5分で今日が終わっちゃう。このまままつ止まつてしまえばいいのに…。

第42話・3のジンクス

ベンチに座つて、どれくらい泣いていたんだろうか。どれだけのことを思い出したんだろうか。心ちゃんの好きなところ考えてたら、止まらなくなつて…何百個も何万個もあるんじゃないかつて思った。きっとその全ての条件が当てはまる人が、この世の中には何人かいるんだと思う。でも、心ちゃんじゃなきゃダメ。結局こう。なんかわからないけど、愛してる。理由なんかないけど愛してる。結局それが一番強い。

どうしたもんかと、溜め息をついた時、ゆっくり近付いてくる足音が聞えた。たぶん、痺れを切らした大樹が迎えに来たんだろう。…なんて説明したらしいかな。

「…ちこ？」

えつ、今、ちこって呼んだ？…大樹じゃない。あたしが顔を上げると、心配そうにあたしを見つめる心ちゃんが、そこにいた。なんでいつも絶妙のタイミングで…。

「…人違いかと思った。」

そう言うと心ちゃんは、昔と変わらない笑顔を見せた。声のトーンも話すリズムも全部変わらない。あの頃のままの心ちゃんだ。「なに…してるの？」

聞いてから、ハツとあたりを見回した。もしかしたら一人で來たんじゃないのかも思つたから。でも、どうやらあたしたちの他に人の気配はなかつた。

「なにして…なんもないけど。」

「なにそれ。」

思わずあたしが笑つと、心ちゃんは自然と隣りに腰掛けた。…この感じ、懐かしいな。

「…元気にしてた？」

「うん。普通に元気だった。」

もちろん、嘘をついた。寂しかったとか逢いたかったとか、言つてしまつたら今までの3年が無駄になっちゃう気がしたから。

「…そつか。」

「…心ちゃんは？」

「俺は…」

心ちゃんはじつとあたしを見つめたかと思つと、何も言わずに下を向いた。あたしを捨てた分際で、自分も『元気だ』と言つのは違うと思ったのだろうか。心ちゃんは優しいからね。
何を言えばいいのかわからず、お互黙つたままの時間が流れた。隣りにいる心ちゃんの手を握りたい、その腕にくるまれたい…そんな欲が次から次に出てきて、その感情を押さえ付けるのでいっぱいいっぱいになる。逢つて声を聞くとなおさらわかるんだ。あたしはまだ心ちゃんを愛してゐること。

…こんな日に逢いたくなかった。出来ればもう一度と逢いたくなかつた。

「…あたし、そろそろ帰らないと。」

これ以上一緒にいられない、そう思つた。我慢の限界。心ちゃんが今日という日にこの場所に来たこと。それだけで、あたしはこいつを期待してた。あたしに逢いに来たんじゃないかつて。

…だったら、なんなの？ 心ちゃんがあたしに逢いに来たんだとしたら、あたしはなんて言うの？

今の自分には何も答えを出せなくて…時々、頭の片隅に車の中で待つ大樹のことが浮かんだ。そして、頭の中の大輝が『何のために来たんだ』ってあたしを叱るの。

「…送つてくよ。」

帰ると言つたのになかなか動じつとしないあたしより先に、心ちゃんがそう言つて立ち上がつた。

「大丈夫。…待つてる人がいるから。」

ちゃんと言わないと、流れのまま心ちゃんと一緒に帰つてしまいそうな自分がいた。また、肝心なところで大輝を裏切つてしまつ。早く

くこの場を去らないこと…。

「…彼氏？」

「…。」

あたしはあえて何も言わなかつた。彼氏だと嘘をつきたくもなかつたし、彼氏じゃないよって言つのも『あなたを引きずつてます』つて感じがして言えなかつた。あたしはようやく立ち上がり、車の鍵をポケットから出した心ちゃんに

「ありがと。」

とだけ言つて背を向けた。

バイバイは言いたくなかった。これでほんとに最後。もう一度と逢わないだろうけど…バイバイは今のおたしには悲しい言葉過ぎる。まだ、言えない。歩き出したおたしは、絶対に後ろを向かないと心に決めた。おたしを見送る心ちゃんの姿を見たら、たぶん泣き崩れてしまう。必死に涙を堪えて歩いた。何もなかつた顔で大輝の元へ帰ろう。それがきっと一番幸せなんだ。

「…ちこ…」

手首を掴まれ、びっくりして、おたしは足を止めた。…びつして追いかけて来たりなんかするの？

「このままじゃ、今日ここに来た意味がない。」

「…え？」

あたしが振り返つて首をかしげると、心ちゃんはゆっくつあたしから手を放した。

「この前、ちこに逢いに行つた。あの飲み屋でバイトしてるので知つて。…もう、辞めたあとだつたけど。で、今日ここに来るつて聞いたんだ、男の人に。『ここに逢いにくるくらいなら、11月5日におちかに逢つてくれ』つて。言いたい事はそこで言つて欲しいって言われた。」

「そんなの、聞いてない…」

それを言つたのは間違なく大輝だ。あたしが今日ここに来るのを知つてるのは、大輝しかいないもん…。

どうじうつもり？大輝の意図がわからない。

困惑してゐるあたしをよそに、心ちゃんは落ち着いた様子で話し始めた。

「あいつも、今日に賭けたんだと思つ。俺も今日に賭けた。」

「ちょっと待つて、話が見えない…」

「忘れられなかつた。ちこのこと、毎日考へてた。俺から別れるつて言つたくせに、実際ちこがいないとなにも手につかなかつた。家に帰るとちこがいる気がして…ちこが、どれだけ俺の中でかかつたのか離れて気付いた。」

あたしは口を開けたまま、心ちゃんの話を聞いていた。いや。聞き流す、という表現のほうが近いかもしれない。今、自分の目の前で起こっていることが、全部幻のように思えた。心ちゃんの言つてゐる意味がわからない。なにが起きてるのかわからない。

「…なに、言つてるの？だつて、すずは？」

「…今思えば、同情だつたんだと思つ。可愛がつてたのは事実だし、弱つてゐる姿を見て助けたいと思つた。でも、フラれた。」

「え？」

「ちこと別れたら、毎日必要な何かが足りない感じで、人を助けてやれる余裕なんてなくなつた。超ダメ男だつたから…言われて当然だつたと思つ。このままじゃダメだと思つて、ちこに何度も何度も逢いに行こうとした。でも、あんなに沢山泣かせたくせに、今さらどんな面下げて逢つたらいのかわからなくて、結局…。」

「なに、調子いいこと言つてんの…？あたしがほんとに必要なら、別れる前に気付いて欲しかつた！あんなに一緒にいたのに、他の子に負けて…。今さら忘れられないとか言われても信じられるわけないじやん…！」

「それはわかつてるよ…。」

心ちゃんは少し俯いて、泣きそつな声でそう言つた。

「そう言われるとつたから逢いに来れなかつた。そんなんでぐずぐずしてゐる間に何年も経つて、今さら逢いに行つても、ちこは幸せ

にやつてるんじゃないかつて…

「…幸せなんかじゃなかつた！心ちゃんのせいですつと苦しかつた。あたしがどれだけ心ちゃんを好きだつたか、知つてゐでしょ…。簡単に消えるわけないじやん…」

涙が零れた。勝手に『幸せにやつてる』だなんて思われてたことが悔しかつた。あたしはすつと心ちゃんに苦しめられていたのに。

「ここの前、ちここの声聞いたら、止まらなくなつたんだ。頑張つて忘れようとしたけど、やつぱり無理だつた。勝手だつて言われてもいい。俺はちこが好き。ちこじやなきや、ダメなんだよ…。」

心ちゃんの声が、言葉が、あたしの胸を締め付けた。こんなにも嬉しいのに、こんなにも苦しい。

この3年、大輝のそばにいて、ずっと忘れよつとしてきたのに、心ちゃんのたつた一言で気持ちが揺らぐ。ずるい。何で今さらそんなこと言うの…。今、心ちゃんの胸に飛び込んだら、あたしの3年はなんのためにあつたの？全部無駄になるんじゃないの？別れて大切だつて気付いたつて…そんなの、あたしのプライドが許さないよ。

「…あたし、ずっと心ちゃんを忘れようとしてきたんだよ？なのに、今さら好きつて言われても素直に受け止められない。そんなの許せない。信じられない。」

大輝は何を望んだの？あたしがこれを乗り越えて、大輝のところに帰らないとダメつてこと？そこまでしないと、あたしの『心ちゃんを諦める』つて言葉が信じられないってこと？

「信じられないなら、信じてもらつまで何年でも言い続ける。俺はもう後悔したくない。どうしてもちこが好き。受け止められないなら、ちやんとフツて。」

そんなの、卑怯だ。あたしが心ちゃんをフれるわけない。サヨナラなんて言えるわけない。今でもこんなに好きなのに。

「でも、支えてくれた大輝を、無償の愛をくれた大輝を裏切りたくない。もう傷つけたくないよ…。」

「…わかった。心ちゃん、ばい…」

ああ、ダメだ。

「だめ、言えない……。」

そう言って、あたしは首を横に振った。バイバイって口にしたら、涙がびっくりするくらい出てきたから。……体は正直だ。大輝にサヨナラするときも悲しくって涙が出た。でも、ほとんどが大輝を傷つけたことに対する『ゴメン』って気持ちの涙。でも、今は違う。また心ちゃんを失うことへの恐怖の涙。

心ちゃんも大輝もどっちも大切。でも、失つて苦しくなるのは……心ちゃんだ。恋愛は綺麗事じゃ片付けられない。大輝を失つてもいい。傷つけてもいい。それでもやっぱり目の前のこの人だけは、失いたくないの。ひどい女でごめんね、大輝。

「……俺ともう一度付き合つて？」

心ちゃんはそつとあたしの涙を拭いて、そう言った。こんなことをされたら……NOなんて言えるわけない。

「……するいよ。」

そう言って泣き止まないあたしを心ちゃんは力強く抱き締めた。懐かしい心ちゃんの匂いがあたしを包む。なんだか幸せで余計涙が零れた。

大輝を裏切った自分はすごく嫌い。悪い女だと思う。心ちゃんをフフて、あたしを大切にしてくれた大輝を選んだら、それはそれは素敵な恋だつたと思う。みんなその恋を選ぶのかも知れない。でも、あたしには出来なかつた。あたしにはこれが真実だつた。

あたしたちは2人で大輝の元に行くことにした。ちゃんと、話さなきやと思ったから。でも、駐車場に着くと、そこにはもう大輝の車はなかつた。

「……わかつてたのかな。」

心ちゃんが言つた。もしかしたら、そうなのかもしれない、と思った。あたしがこの状況でも心ちゃんを選ぶつて、大輝にはわかつてたのかも……。あたしはこの前の大輝の言葉をふと思い出していた。

『それくらいのダメージがないと諦められない』

…きつと大輝は今日が最後の日だつて、最初から決めてたんだ。勝負を賭けてなんかいなかつた。

「…ありがと。」

もう、声の届くはずのない大輝にあたしは咳いた。大輝に出会つたこと、一緒にいたこと、それもあたしの人生で大切な時間。必要な時間だつたと思うの。

それからあたしたちは大掃除したての、あの部屋に帰り、また一緒に暮らすことにした。周りはあたしを馬鹿だつて言つと思つけど、今はとりあえず幸せ。

あんまり自慢できるような話じやないかもしけないけど、これで良かったと思うの。3年離れても消えない愛があつた。それはすごいことだと思つから。

これからはずっと心ちゃんと一緒にいれますよ。

付き合つて3年で別れ、それから3年の時が流れ、今のあたしたちがいる。幸せな笑顔がある。

これがわたしの『3のジンクス』。

第42話・3のジンクス（後書き）

読んでいただきましてありがとうございます……この話を書き始めてから、あたし自身も波瀾万丈の毎日でした……（・・・・）彼氏が浮気をして、まんまとつられてしまつたあたしですが 笑 結局『お前じやないと…』ってコトで、揉めに揉めてヨリを戻したんですが、その半年後、浮気相手と関係が終わつてなかつたというコトが判明…揉めますよね。笑 カなり束縛が激しくなるよ、つて条件で今はうまくやつております!! まあ、おかげでこの話が長期間ストップしてしまつたり、いきなり更新したりと、かなり不安定でしたが、なんとか書き終えることが出来ました 皆さんのお援のおかげですね（・・・）この話のつに、自分も振り回されっぱなしですが、結局惚れた方が負けだと最近はドンド構えてますね 笑 次回作は出来れば温かい話が書きたいです!! 今後も頑張りますので、応援お願い致します（・・・）ゞ感想などいただけたら嬉しいです!! よろしくお願ひします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5558c/>

3のジンクス

2010年10月24日01時48分発行